アジア日本研究第2号

Asian Journal of Japanese Studies Issue No.2

亜洲日本研究第2號

特集:アジア視座からの日本研究

Featured: Japanese Studies in Asian Context

SJA

ISSN 2223-5841

アジア日本研究

第 2 号

前言 1

特集:アジア視座からの日本研究
【寄稿論文】
アジア視座からの日本文学研究 大嶋 仁 2

一般投稿
【論文】
同語反復名詞謂語句的語義結構和語境特徴 陳 訪澤 ・ 張 秀娟 13

室生犀星句の特質について
—劣等感コンプレックス脱出の努力— 劉 金挙 24

试论《古事记》中的婚恋传说 刘 文星 43

【実践報告】
学習者が捉えた「いい」文章のポイント
—初中級学習者による説明文課題のピア・レビュー— 水戸 淳子 52

【書評】
與那覇潤 著
『中国化する日本 日中「文明の衝突」一千年史』 青山 玲二郎 59

論文執筆基準 61

編集後記 65

アジア日本研究 第 2 号

前言

ここに2011年６月の創刊号に続き 香港・マカオ・広東日本研究大学聯合論文誌『アジア日本研究・亜洲日本研究・*Asian Journal of Japanese Studies*』の第２号を発刊する運びとなった。

今号は、「アジア諸国・地域をフィールドにする研究者に広く研究の成果を発表する場を提供し、新時代の日本研究の座標を打ち出す」と言う当誌創刊の刊行目的に沿うべく寄稿依頼論文による特集セクション「アジア視座からの日本研究」を設けた。寄稿をご依頼した方々の避けようの無いご都合の変更により、大嶋仁福岡大学教授・日本比較文学会会長の「アジア視座からの日本文学研究」のみの掲載となったが、日本文学、ひいては日本研究の対象となる「日本」を単一固定化した概念として捉えず、異なった文化圏から異なった歴史的過程を経て統合された集合体として捉えるべきだという指摘は、翻って「アジア視座からの日本研究」を考える時、「アジア視座」を自明の理の固定された単一体として見ず、流動し続ける集合体として其の地域の特異性から見えてくる日本研究、そして特異性の中でも共通して見えてくる普遍的な日本研究の要素、双方を注意深く見て行くべきだという示唆へも繋がり、大変意義あるものとなった。

又、一般投稿論文は無記名論文の査読委員による厳正な査読の結果、多数の応募の中から 3 つの論文、1つの実践報告、そして1つの書評が掲載となった。

これらの論文がアジア地域からの日本研究の活発な議論の誘引に貢献することを祈りたいと思う。

『アジア日本研究』編集副委員長　小川　正志　（香港大学）

アジア視座からの日本文学研究

Japanese Literature Studies in Asian Context

大嶋 仁 (OSHIMA Hitoshi)
福岡大学 日本比較文学会会長
Fukuoka University, Professor
Japan Comparative Literature Association, President

1. 日本とはなにか

今号の特集は「アジア視座からの日本研究」ということであり、論者の専門が比較文学であることから、日本文学を「アジア視座」という視点で論じてみたい。議論が錯綜しないために、あらかじめ用語の意味をはっきりさせておく。とくに「日本研究」の「日本」という語が問題であるので、これをはっきりさせたい。多くの日本人は「日本」を自明のこととしているが、それほど自明なのか。そこをまず追究してみたいのである。

「日本」が国家としての日本国のことを意味するのなら、「日本」は歴史上の存在である。言い換えればそこには歴史があり、歴史があるということは初めがあり、いつかは終わりが来るということである。事実、歴史家の言うところでは、日本国が誕生したのは早くとも 5 世紀、遅ければ 7 世紀。大化の改新をもって日本国が成立したとの見方が有力で、それすなわち大和国の成立を意味する（網野 1993）。だが、そのときの大和は今日の日本列島の半分も領有していなかったのだから、今日の日本人が考える日本とはほど遠いと言わねばならない。

今日の日本国の原型が出来上がったのは源平の争いが終わり、鎌倉時代を迎えてからである。しかし、そのときでもまだ北海道は日本でなかったし、南西諸島が日本の一部ではなかった。江戸時代には蝦夷地や琉球王国との交易関係があったから、この時代になっても沖縄や北海道は日本ではなかった。今日言うところの日本国が出来たのは明治政府が沖縄などの南西諸島を領有し、北海道をも領有して以降のことである。なのに、日本人の多くは昔から今までずっと同じ日本があると信じている。

多くの日本人が自身の国の成立事情を知らないのは、日本列島＝日本という思い込みが強いためである。なるほど列島は大陸から切り離されているから、地理的区別のせいでそう考えるのであり、日本という政治区分と列島という地理区分とが同一視されるのである。そのような列島も、1 万年以上前には大陸とひと続きだったという事実があるのに、人々はそれも知らない。歴史の事実、地質上の事実にもっと敬意を払うべきだろう。

たとえば縄文土器などを見て、そこに日本文化の原点を認める人は跡を絶たない。弥生文化は大陸から来たが、縄文はもともと日本にあったなどと言うのである。しかしながら、縄文時代に日本という国がなかったことは誰が見ても事実である。縄文文化が今日の日本文化の土台になっていることは認めるとしても、だからといって縄文時代から日本があったわけではない。縄文＝

日本というような偏見にしがみついていると、日本が世界のあちこちの地域と結ぶネットワーク上の一点であることが見失われてしまうであろう。

ついでながら言っておけば、日本語という言語もその存在は確たるものではないのに、これも太古から今まで存続してきたと思われがちである。日本語なる言語が出来上がったのは比較的最近のことであって、日本人が日本語のみでやっていける時代になったのは大正以降のことである。奈良時代以前を振り返ってみよう。そこでは漢文・漢語が唯一の文字言語で、土着語すなわち和語＝大和言葉は話し言葉にすぎなかった。それら二つは互いに没交渉だったわけではないが、両者の間には距離があり、和漢並行して日本人の言語世界を形成していたのである。この並行現象がくずれ、和語と漢語が入り混じり、いわゆる和漢混交文が成立したのは鎌倉時代になってからであるが、鎌倉時代になっても知識人たちは相変わらず漢文を習得しつづけたのであって、和漢併用はつづいたのだ。この傾向は江戸時代末期、否、明治までもつづき、日本人が日本語のみで暮らすようになったのは早くても大正時代である。第二次大戦の敗戦を区分と定め、戦後になって初めて日本人は日本語のみを用いるようになったという考え方も成り立つということを忘れるべきではない。

ただし、日本人が日本語のみを用い、日本語がようやく独立した言語になったといっても、その基盤がいまだに脆弱であることも認めねばならない。今日の日本語の大半が大和言葉ではなく漢文から来ている漢語、翻訳語と称される新漢語、そしてカタカナ表記の外来語から成っている事実はいかんともし難い。幸か不幸か、数少ない例外を除けば、日本人はかつてのように外国語と外国文学を徹底して習得することをやめている。それゆえ、日本語だけで暮らせるようになったと言えば言えるものの、外国語が参入している現在の日本語を用いる現代の日本人が元の外国語を知らないのであれば、これまた足元が不確かなのである。このような言語状況に大半の日本人が気づいていないからといって、そこに問題がないわけではない。

以上をまとめると、「日本研究」という言う場合の「日本」は統一されたひとつの実体ではない。今日の日本は政治的には統一国家かも知れないが、複数の文化がいまだに混在すると考えたほうが実情にかなっている。昭和前期、すなわち第二次大戦以前の日本においては「国体」を中心とする文化的統一体の観念が支配的だったが、それは構築された国家神話であって、現実に合致したものではなかった。江戸時代までは「上方」という言葉があったように、関西と関東では今でも文化が異なるのであって、九州と本州でも異なり、関東と東北でも、北海道とでも異なるのである。現代はグローバル化の時代で英語が世界中どこへ行っても通用する言語となりつつあるが、それと同様にメディアと教育の力で、日本語が列島のどこへ行っても通用する言語となっている。しかし、そうしたことは文化の表層にかかわっても、深層は別ではないだろうか。日本列島にはいまだに複数の文化が並存すると考えないと、「日本研究」を具体的に進めることはできないどころか、誤った方向へ行かせてしまうように思えるのである。日本列島に複数の文化を認めよう。そうすれば、日本というものを世界の文脈、もっと正確に言えばアジアの文脈において把握できるようになると思えるのである。

2. アジアのなかの日本

日本文化が単一ではなく、複数の文化がそこに並存していると主張することは多文化主義の視点に立ってはじめてなし得ることである。日本における多文化主義というと、人はしばしば旧植民地からの移住民、すなわち「在日」を口にし、植民地主義に問題を収斂させる傾向があるが、植民地主義を問題にするだけでは近代しか見えてこなくなる。言い換えれば、古くからある列島内の諸文化に正当な地位を与えられなくなるのである。アジアの中の日本を考えるうえでは、日本文化の形成過程において同じ列島内に異なった文化圏があったことにまず注目し、それらが現在もなお完全には消滅していないことに注意を向けたい。列島内の異なった文化圏は、それぞれがアジアの諸地域と密接しているのである。

つまり、「在日」を言うなら「沖縄・奄美」も、「アイヌ」をも言わねばならないということである。日本列島の歴史を多文化主義に即して見た場合、最初に浮かび上がってくるのは何と言っても北方民族文化の一環であるアイヌ文化圏で、つぎに関西地域を中心に発達し、東は関東から南東北にかけて、西は九州にまで及んだ大和文化圏が来るのである。三番目に来るのは大和文化の影響が長く及ばなかったと言われる南西諸島の文化圏で、つまり日本列島には大きくわけて三つの文化圏が並存しており、近代以降はこの三つが「日本文化」の名のもとに統一され、地域差がまるでなくなってしまったかのような錯覚を起こさせているにもかかわらず、それらは表面から消え去りはしても文化史の深層において存続しているのである。いわゆる日本文化なるものは、つまるところ、この三つの文化の相互作用のうえに成り立っているわけだ。

この多文化主義の見方が日本をアジアに位置づけるのに役立つというのも、まずアイヌ文化圏はアジア大陸の東北部および北米大陸におよぶ島々の文化圏とひとつであるから、日本文化は東北アジアさらには北米の先住民文化とつながる。つぎに、大和文化圏は日本国が成立する前から列島に在住していた諸々の土着集団の文化のうえに、朝鮮半島から移住してきた人々の文化が加わり、さらにその上に中国の隋唐の文明が接ぎ木されたものであるから、日本文化の中核をなすこの文化が朝鮮半島の文化および中国文明との連携によって成り立っていると見ることができるのである。事実、日本語の統辞法は朝鮮語と同じであり、基本語彙は東南アジアあるいは中国南部と共通し、高等語彙には漢語が多い。大和文化圏の成立事情は、そうした日本語のあり様に如実に反映しているのである。

大和文化の影響があまりないと言われる南西諸島については、近年の研究が明らかにしているように、中国南部、台湾、東南アジアの諸文化とひとつづきの文化圏である（辰巳 2000）。このことは、日本列島を複数の文化の並存する場と見ることによってそれぞれの文化が世界の様々な地域とつながり、複数の地域文化のネットワークのうえに日本列島の文化が開花していることを示す好例であり、もっと多くの日本人が意識してよいことである。もちろん、近代になればそこに西洋文化の影響が入ってくるわけで、人々の関心はついこちらのほうに注がれがちだが、このほうの影響はアジア諸地域の文化のそれに比べると歴史が浅いと言ってよく、日本文化を考える場合には列島周辺部のアジアをまず見ておく必要があると思われる。近代における西洋文明と日本との関係は圧倒的に物的交流の関係であって、人的交流についてはアジア諸地域との交流と同

列に論じることはできない。「脱亜入欧」は理念としてのみ可能であって、実際には不可能なのである。

もちろん、現在進行中のグローバル化は欧米化の一種であり、これによる文化変容は非常に大きいので、現在の日本文化を考える場合にはこちらのほうを重視すべきだという意見にも一理はある。しかし、日本人がいくらコーラを飲んでもアメリカ人になることはなく、英語からの外来語の日本語において占める分量が漢語のそれと比べて多くなっているという事実はあっても、漢語が使われなくなることはないにちがいない。ほかならぬ和漢混交の文的構造があればこそ、漢語のかわりにカタカナ言葉がそこにはめ込まれ得たのであって、日本語に漢語あったればこその現象がつづいているのである。極論すれば、日本語におけるカタカナ言葉は新しい形の漢語、そう言ってよい。

言語だけの問題ではない。漢字文明の渡来の意味するところは漢字という文字を通じての価値世界、思想世界、文芸世界の浸透にほかならないのであって、道教・儒教・仏教の渡来と不可分である。言い換えれば、日本人の価値観の基礎を作るのに漢字漢文が大いに寄与しているのであって、道教も儒教も仏教も外来思想であって列島在来の神道こそが日本人の本当の思想なのだなどという国学者流の議論は浅薄に過ぎるのである。江戸時代の国学思想にしても漢文の教養の産物であることは間違いなく（吉川 1977）、古代にさかのぼって神道の成立を見れば、それが在来の諸信仰の集合であり、仏教という一大宗教思想体系を眼前にしての民族主義的反動であったことは明白であり、その形成に儒仏道の思想が流れ込んでいることは明らかなのである（末木 2003）。最近よく言われるように、日本人も日本文化もハイブリッドである（上垣外 2011）。神道は「純日本」的だとか、日本人は「純血種」だとかいう説には何の説得力もない。

3. アイヌの文学

アジア視座で日本文学を考えるということは、アジアという地域の文学的文脈において日本文学を考えるということである。さきにも述べたように、日本列島には三つの文化圏があるから三つの異なった文学があることになる。その三つとは、北はアイヌ文学、中央は大和文学、そして南西諸島の文学である。今ここに、これら三つの文学の特徴を挙げ、同時にそれぞれのアジア文脈における位置づけを明らかにしたい。

まずアイヌ文学であるが、アイヌ語は日本語と全く異なるため、日本文学の核をなす大和文学とは別個の文学と考えてよい。しかし、その内容を考えるとき、必ずしも大和文学と無縁ではなかったのではないかと思われる。アイヌ語のなかに日本語の語彙が入り込み、逆に日本語の語彙にアイヌ語が入り込んでいることが考えられるように、日本文学とアイヌ文学の間には相互浸透があると考えてよい。

では、アイヌ文学が日本（＝大和）文学と何が異なるのかといえば、前者が口承文学であり、それをローマ字に書きとって日本語に翻訳するまで文字化されずにいたということがあげられる。アイヌ文学は口承文学であり、それがたいへん高度に発達したものと言ってよいのである。また、大和文学とのちがいとしては、そこに表現された世界観のちがいも重要である。どのような文学

にも言えることだが、アイヌ文学も文語と口語の両方の文学があり、前者は聖なる宗教文学、後者は娯楽用の通俗文学となっているが、その両方にアイヌの世界観が反映されているのである（金田一 1992、久保寺 1977）。

アイヌの世界観を知りたいと思えば、「神謡」（カムイ・ユカラ）と呼ばれる文語口承文学を見るに限る。そこに表明されている世界観は、この世界の一切のものが神聖な霊の化身であるというもので、とくに面白いのはアイヌ神謡においては神が語り手となって、自身の物語を語るという形をとっていることである(知里 1923)。言ってみれば、神による「私小説」の展開で、このような文学はついに大和文学には現れなかったものであり、寡聞な論者は世界の他の文学にこうした例があることを知らない。ちなみに、アイヌ文学と同系統と考えられる東北シベリア、北アメリカの先住民族の口承文学を調べてみたが、あるいは類似した神謡がかつてあったのかも知れないが、今日まで残っているようではない。

この世界の一切のものが神聖な霊の化身であるとのアイヌの世界観は、日本文学（＝大和文学）の出発点である『古事記』の冒頭にあらわれた世界観と共通していると見る向きもあるかも知れない。『古事記』の冒頭部には、たしかに産霊（ムスヒ）の具現として万物が現れ、万物に霊性が認められていることがわかるのである。しかしながら、産霊が万物の根源にあるということは、産霊とは生殖力のことであるから『古事記』の世界観はきわめて性的、あるいは自然主義的であると言える。対するアイヌの場合は、そのような要素が見つからず、『古事記』にくらべて超自然的で、ある種の崇高さが現れていると思われるのである。どちらのほうがよいとは言えないにしても、質的なちがいは押さえておく必要がある。アイヌ文学の崇高さは、たとえば近代における東北日本文学の結晶である宮澤賢治の作品に通じるものがある。

アイヌ神謡と『古事記』のちがいとしては、『古事記』の神々が天津神という天界の存在と国津神という地上の存在とに分かれているのに対して、そうした区分がアイヌの神々にはないということも挙げられる。アイヌ世界ではいずれの神も天界の存在であって、それらが地上にさまざまな形で現れるにしても、やがては天界に戻る霊的存在でありつづけるのである。さらに言えば、『古事記』では天津神の地上での君臨、すなわち「天孫降臨」という政治神話が中心となっており、人間、もっと正確には大和の歴史に重点が置かれている。これに対して、アイヌ神謡では人間の歴史はほとんど問題になっていないのである。総じていえば、『古事記』に発する大和文学は人間世界の文学、アイヌ文学は霊的・超人間的と言ってよい。

ところで、『古事記』が国家神話を展開しているということは、そこにおいて神話と歴史が連続しているということで、歴史が神話化され、神話が歴史化されていることを意味する。『古事記』に出発する大和文学において歴史を文学化した叙事詩の発達が見られないのも、そのためなのである。叙事詩というものは歴史事件をひとつの物語詩とするときに生まれるものだが、そうしたものはアイヌ文学には見られても大和文学には見られない。『古事記』のなかではスサノヲやヤマトタケルの物語がほとんど唯一の叙事詩的部分なのだが、その形式は韻文ではないから詩とは言えず、詩歌は主人公である英雄の詠んだ歌として含み込まれているだけなのである。スサノヲやヤマトタケルが大和文学の祖型であるとするなら、大和文学はついに本当の叙事詩を持たなかったことになる。叙事にかわって抒情が栄えたのである。もちろん、『平家物語』のような叙事文学

も大和文学の一部ではある。しかし、それが大和文学の範とされたことはなく、範とされたのは四季折々の風物に心を託す抒情歌なのである。

一方のアイヌ文学は、たとえば古代ギリシャと同じく人間の歴史を叙事詩として語り、いわゆる英雄叙事詩を生み出している。アイヌ文学は一方に「神謡」のような宗教文学を持つとともに、金田一京助が「虎杖丸」と訳した英雄叙事詩をももっているのである（金田一 1936）。長大な叙事詩が口承であったことは、アイヌの語り部たちがたいへんな記憶力の持ち主だったことを示している。アイヌには、古代ギリシャのホメロスに匹敵する人が２０世紀になるまでいたのである。

先にも触れたが、アイヌは北方民族の一つで、文化的には東北シベリア、北アメリカの諸民族との関連が強い（大林 1995）。しかし、これらの北方民族の文学はいずれもアイヌ文学よりはるかに素朴な形式のものであって、そこに文芸的練磨の跡が見られないのである。アイヌ文学が口承文学にしてあそこまで高度に洗練された形式と、真に文芸の名に値する複雑な展開と細かい文飾を持つに至ったことの背後には、あるいは大和文学や中国・朝鮮の文芸との影響関係があったのではないか。アイヌの所持していた品々に東北アジアの物産が紛れ込んでおり、彼らが海を越えて交易をしていたことが知られているので、文字を介さずとも文芸の上で交流があったのではないかと考えられる（Fitzhugh/Dubreuil 2001）。

4. 大和の文学

つぎに日本文学の中核である大和の文学であるが、従来の文学史で「日本文学」とされてきたものはこれである。『古事記』『日本書紀』に始まり、『万葉集』でひとつの頂点に達し、さらに大和化が進んで『古今集』を生み出すに至ったこの文学。中核となる言語はいわゆる大和言葉で、それが最初は漢字によって表記され、のちに仮名あるいは漢字かな交じりで表記されるようになったのである。

この文学の特徴は、朝鮮古代文化の影を宿して出発し、中国の古典文学をモデルにして発達したにもかかわらず、その中心が抒情にあり、民衆文化を反映する代わりに宮廷貴族文化を範とするところにある。『古今集』こそはこの文学の本質を集約したものであり、これが聖典として後代の大和文学に影響を与えつづけたことを考えれば、『古今集』の特徴こそは大和文学の特徴であると言ってよいと思われる。では、『古今集』の特徴は何かと言えば、まず短歌形式で統一されている点が挙げられる。短歌には叙事は不可能である一方、抒情を端的に表現するには適しているのである。『万葉集』においては長歌のあとに全体の叙情を集約する短歌が添えられ、長歌には短歌誕生の状況説明が盛り込まれ、そこに最低限の叙事的要素を見ることができたが、そうした状況を離れて独立した短歌は、背景となる歴史状況を反映するものではなくなり、制作者の感情を自然風物を介して表現するという「寄物陳思」の方法による抒情詩となったである。この「寄物陳思」は重要で、『古今集』においてはさらにそこに四季の移り変わりを導入した。いわゆる「日本美」がここに生まれたのである。

つまり、大和文学は『古今集』によってひとつの完成を見たのであり、記号化された自然風物が定められたコードによって意味を確定するという一種の隠喩体系が制度化されたのである。こ

の歌集以降の大和文学がこの制度によってその表現方式を固定化され、それがために詩歌が形骸化することになったことは確かだが、他方、この隠喩体系のおかげで、ひとつの独特な美学が歴史を超えて生きながらえることができたというのも本当である。大和文学とは要するに「花鳥風月」と呼ばれる自然風物の記号体系と「うつろひ」の観念にもとづく四季の変化とを一つのセットにしたもの、そう言ってよいが（佐藤 1979）、そうした文学自体を外から見た場合には、世界にも類のない独自な文学表現の実現と評価することが出来るのである。日本の庭園にしろ、伝統的器物にしろ、着物の柄にしろ、『古今集』以来の美的遺産によらないものはない。世界に知られる「日本美」とは、まさに『古今集』的美のことなのである。

もっとも、『古今集』が画したのは大和文学の第一段階であって、そこでこの文学が終わったわけではない。『古今集』にはまだ宮廷の香りしかなかったのであるが、中世になると社会構造が変化し、武家の台頭、庶民の誕生、交易者の移動などさまざまな新しい状況が出現し、そこに大和文学は第二段階を迎えるのである。人によっては、この第二段階は『平家物語』のような戦記物によってもたらされたと考えるかもしれないが、実際に第二段階を画したのは謡曲だということを提案したい。謡曲は中世文学の華と言ってよく、鎌倉時代に生まれた叙事文学と平安時代の和歌物語とを総合し、構造的にも内容的にも平安の和歌物語より高次の完成を見たのである。

では、謡曲の構造とはどういうものか。これを煎じ詰めていえば、非連続的に対立する二項を併置し、それを第三の要素によって媒介させて調和させたものだと言えばそれで十分であろう。シテ・ワキ・ワキシテの三者がまさにこの構造を表し、生者と死者、幻と現、聖と俗、叙事と抒情を媒介して接合する世界がここに極限的な単純さをもって実現したのである。ちなみに、このような構造は芸術作品一般に見られるもので（Lotman 1990）、大和文学の専売特許ではない。謡曲はそうした構造の具現として最も単純・簡潔なものだと言うことが出来、その意味でその文芸的価値は大きいのである。

なお、謡曲の出現を多文化主義の立場から言うならば、列島の西と東の文化交流が進展した結果、東北日本の霊的世界観と西南日本の古典美の世界とが融合したという風に評価することも出来る。また、謡曲の中世において大和文学はようやく日本文学となったとも言ってよく、逆に、謡曲以降の日本文学は衰退していったと思われるのである。なるほど、江戸時代前期に芭蕉のような達人が現れて新たな文芸を開いたように見えるが、芭蕉の精神は新時代の新風俗によって活性化された中世の精神と言ってよく、その本質は謡曲の構造の継承である。彼の発句、たとえば有名な「古池や蛙飛び込む水の音」ひとつをとっても、そこに表現されているのは「古池」という広がりのある静と、「蛙」という小さな動との「水」という媒介者による融合なのである。近代の哲学者西田幾多郎の言った「絶対無矛盾的自己同一」はまさにこの芭蕉の句に具現されていると言ってよいが、究極の日本美の構造は詩歌においては芭蕉によって、哲学においては西田によって表現されたのである。

大和文学は謡曲以降衰退していったと述べたが、江戸時代前期はまだしも、後半からはそれまでに築いてきた構造を徐々に失っていく過程を示していると言ってよい。儒教の道徳主義と過度の漢文的教養の重視が文学的生成の息の根を止めていったのである。また、明治時代になると漢文重視の傾向は薄れたが、それは漢文重視から欧文重視へと移行しただけであって、そこに本質

的な変化があったわけではない。漢文が欧文に取って替られただけであって、中世に完成した構造美のほうは喪失されつづけていったのである。さらに悪いことに、明治以降に受容した西洋文学の基本的構造のほうは把握されず、その表層部のみが模倣されたために、新たな構造が旧い構造に取って替ったということも起こらなかった。坪内逍遥が提唱した「写実小説」なるものも誤解されて、当初とはきわめて異なった小説群が生み出されたのである。唯一の例外は近代文学史において「通俗」として不当に貶められてきた尾崎紅葉の小説であり、「写実小説」は「告白小説」と一体化し、社会的視野の欠けた「私小説」全盛となった。構造美を欠くこの新傾向は文芸としての日本文学の価値を大きく下落させたのである。

しかし、このように言ったからとて、近代の日本文学の営為の全てを否定しようというわけではない。社会性とドラマ性という小説の基本要素が欠落する「私小説」ではあるが、自己自身を語ることによって内省を深め、新たな自己を構築するという点では評価できるのである。そうした「私小説」のなかには、時として作者自身の魂の救済までが描かれ、それを読むことを通じて読者までもがカタルシスを得るという例もある。たとえば志賀直哉の『暗夜行路』などがそれに相当するのである。

ところで、近代の日本文学において特徴的なこととして、それまで中央の文学に見つけることのできなかった文化的要素が見つかるということが挙げられる。とくに顕著なのは東北日本の文化的要素、すなわちアイヌ的要素が日本文学に入ってきたことである。端的な例は前にもあげた宮澤賢治で、彼の独特の世界観と作話形式は、どう見ても列島の東北部に残存していた文化的要素を含んでいるのである。彼の文学についてそこに仏教思想の影響やモダニズムを認めることももちろん可能であるが、北方民族の文化がそこに反映されていることを見逃してはならない。

5. 南西諸島の文学

列島の第三の文学、南西諸島の文学について触れる時が来た。この文学の特徴のひとつは、その言語が大和の言葉と基本的に同じだということである。アイヌ語と日本語には共通性がほとんどないのに、南西諸島の言語は大和語と共通の源を持ち、かなり古い時期に二つに分かれたと考えられる（外間 2000）。人によってはこの言語を大和語の古い形であるとし、その抒情歌謡文学の集成である『おもろさうし』には『万葉集』に用いられている言葉づかいやモチーフと共通のものが現れているという（谷川 1991）。この見方からすると、南西諸島の文化と文学は古代の大和のそれと同類であり、大和が進化したのに対しこちらは昔のままでありつづけたことになる（小野 1977）。ヤマトの人間の郷愁を誘う所以を説明するには適しているが、それだけで南西諸島の文学を尽くすことが出来るかどうかは疑問である。

というのも、近年の研究が明らかにしているように、沖縄や八重山、そして奄美に現存する歌謡文学の起源が、南中国やベトナム北部などの少数民族のそれと類似しているからである（前出、辰巳正明の著書など）。このことを知った人は、当然ながら南西諸島の文化の源がそれら東南アジアの少数民族にあると考え、そこに照葉樹林文化とか稲作文化圏とかを重ね合わせ、日本文化の源泉ここにありとしている。なるほど、そう考えると納得できることも多々あり、同時に日本列

島の基層文学と東南アジアの基層文学との接点も見えてくるのである。

では、そのような南西諸島文学にはどういう特徴があるのかと言えば、自然風物と密接した言葉を多用し、恋歌が多く、基本的に抒情歌であるということがまず挙げられる。この特徴は確かに『万葉集』にも通じるものがあり、大和文学が抒情的であるのは南西諸島の文学を基調としているからだと推測することもできる。ところが、南西諸島の歌謡文学には大和文学にはない特徴もあり、そう簡単に両者を同質と言い切ることはできないのである。すなわち、前者においては後者とちがって歌謡が生活に浸透し、恋ばかりが歌になっているわけではなく、生の表現としての労働や出来事の語りも歌になっている。言い換えれば、南西諸島の文学は抒情歌のみならず叙事歌も発達させているということで、ここに大和文学との大きな差異が認められるのである。

もちろん、そうは言っても南西諸島にはアイヌの英雄叙事詩のような歴史事件をもとにした本格的叙事詩は見当たらない。その意味での叙事詩はないのだが、生活に密着した叙事歌は多々見られるのであって、民衆の生と歌が密着している点においても大和文学の貴族的美的性格とは異なるのである。歌と生が密接しているのはその文学が「原始的」だからだと主張し、そこに大和文学のかつての姿を想像する人も多いが、その想像は間違いでないにせよ、そう考えるだけでは南西諸島の歌謡文学が時代とともに変化してきていることを見ないことになる。南西諸島の権力者を含めた人々が意識してこの文学を保持し伝承してきたこと、そこに時代に応じた言葉遣いやモチーフの変化が見られることを忘れるべきではない。

南西諸島の文学を考えるにあたっては、沖縄をはじめとする島々がかつて琉球王国であって、中国との関係が密であったことをも考慮する必要がある。漢文学が知識層に浸透していたことはその文学の質にも影響を与えたであろうと考えられ、その点をも考慮しなくてはこの地域の文学を真に理解することは難しい。もとより民間の文学としては歌謡が主であるが、それだけで南西諸島の文学を説明しきるのは、大和の知識人の著した漢詩漢文を無視して大和文学を語りつくすことが出来ないのと同様である。漢詩漢文の影響を受けているという意味で大和文学と南西諸島の文学は同様の運命を持っているのであって、ここにアイヌ文学とは決定的に異なる特徴が浮かび上がってくるのである。すなわち、南西諸島と大和文学は、ともに土着文学と漢文学とのハイブリッドなのである。

南西諸島の文学と大和の文学のこうした共通性から、逆に大和文学の特徴が浮かび上がってもくる。大和文学はそれが古代の宮廷を中心に発達し制度化されていったために、民間レベルでの文学表現を十分に発達させることができず、宮廷文学を常にモデルとして美的文学の構築をのみ心がけてきたということがわかるのである。南西諸島の歌謡文学のように生と密接した文学ではなくなった大和文学には叙事歌が見られないが、これも大和文学の特徴である。本来は歌謡文学にあったはずの叙事性は、おそらく『万葉集』編纂者側の意図のもとに削除されたのであって、編纂者＝統治者たちは一定の歴史状況を反映し、その歴史が比較的最近の出来事であるような叙事的な内容を、それが政治的に差し障るからという理由で、おそらく意図的に排除したのである（大嶋 2011）。ちなみに、勅撰歌集に逆賊の歌は載せないという決まりがあったことが『平家物語』において示されているが（巻の七「忠度都落」）、そのような取捨は『万葉集』にもあったにちがいない。この歌集を出発点とした大和文学は最初から歴史的叙事を削除することで成り立つ

文学だったのである。

6. 今日の比較文学の立場

これまで比較文学の立場から日本文学というものを多文化主義にのっとって見てきた。日本列島には大きく分けて三つの文学があり、それらが相互に影響し合って日本文学を作っていることを述べたつもりである。同時に、それら三つの文学がアジアのいくつかの地域と連関し、日本文学というものが世界の文学のネットワーク上に位置していることも述べた。世界のどの文学もそうであるように、日本文学は決して孤立した文学系ではないことはこれではっきりしたと思う。

もちろん、今日の比較文学の立場からすれば、日本文学を論じるにしてもこれで十分というわけではない。アジアという地域における日本文学の位置づけも重要であるが、人類の文学としての日本文学の特質を明らめることも重要なのである。そのような考察の一例を略述し、本論を閉じることにする。

一例というのは本論の論者が現在携わっている研究例で、論者はいま世界の幾人かの比較文学者とともに「文学における身体意識」について研究しているのである。この研究の基礎にあるのは現在目覚ましい進歩を遂げつつある脳科学であり、脳科学によれば我々の自己意識の基礎には身体感覚があり、その身体感覚をどのように人間が意識し表現しているかは文化によって異なることがわかっているのである。文化によって身体感覚が異なることはかなり前から文化人類学によって示されてきたが、脳科学はこれを言語の影響によって形成される脳神経システムの問題として捉える。脳は刻々と身体から送られる信号を化学的に処理し、その解読をしていくのであるが、その解読が身体を核とする意識となり、それがさらに言語に翻訳されて身体感覚にもとづく自己意識が固定されていくのであるから、これは言語と密接した文化システムの問題なのである。文化によって、言語を通じて固定された自己意識システムが出来上がり、そこから文学も生まれてくる。仮に日本文学に他の文学と異なる部分があるとすれば、それは最終的には日本語という言語に影響を受けて出来上がった自己意識のシステムの問題なのである。芭蕉の俳諧にしても、志賀直哉の心境小説にしても、あるいは宮澤賢治の心象スケッチにしても、それらを人類の文学として理解するには上記の脳科学的理解が必要である。脳科学をとおして日本作家の作品を見るとき、そこに人類の文学としての普遍性と特殊性とが見えてくるのである。比較文学はアジアとか東アジアといった地域文学のネットワークを重視しようとするが、それだけで十分ではない。生物としての人類の営為としての文学を考えるのも比較文学の仕事であり、そのなかで日本文学なら日本文学の普遍性と特殊性とを明らかにすることもその任務としているのである。孤立したシステムとして日本文学を見ることは論外であるが、アジアという地域にこだわりすぎるのも問題となる。人類という生物が複雑な社会形成によって自らを生かし、かつまた自らを殺してきた事実が文学にいかに反映されているか、これからの比較文学はそれを明らかにしていくことになる。

参考文献

Fitzhugh,William/Dubreuil,Chisato: *Ainu, spirit of a northern people*, University of Washington Press, 2001

Lotman,Yuri: *Universe of the Mind*, Indiana University Press, 1990

網野善彦『日本論の視座』、小学館、1993

大嶋仁『比較文学論考』、花書院、2011

大林太良監修『Northern Peoples』、北方民族博物館、1995

小野重朗『南島歌謡』、ＮＨＫブックス、1977

上垣外憲一『ハイブリッド日本』、武田ランダムハウスジャパン、2011

金田一京助『全集』第７－８巻、三省堂、1992-93

金田一京助訳『ユーカラ』、岩波文庫、1977

久保寺逸彦『アイヌの文学』、岩波新書、1977

佐藤正英「花鳥風月としての自然の成立」（金子武蔵編『自然・倫理学的考察』所収、以文社、1979）

末木文美士『中世の神と仏』、山川出版社、2003

辰巳正明『詩の起源』、笠間書院、2000

谷川健一『南島文学発生論』、思潮社、1991

知里幸恵『アイヌ神謡集』（北道邦彦注、北海道出版企画センター、2003）

外間守善『沖縄の言葉と歴史』、中公文庫、2000

吉川幸次郎『本居宣長』、筑摩書房、1977

同語反復名詞謂語句的語義結構和語境特徵*

A Study on Semantic Structure and Context Feature of the Tautology Noun-Predicate Sentence

陳 訪澤 (CHEN Fangze)
澳門大學 社會科學及人文學院教授
University of Macau, Faculty of Social Science and Humanities, Professor

張 秀娟 (ZHANG Xiujuan)
澳門大學 社會科學及人文學院博士生
University of Macau, Faculty of Social Science and Humanities, PhD Student

要旨

「トートロジー」は日常会話や文学作品においてよく一種のレトリックとして用いられている。トートロジー名詞述語文に関するこれまでの研究で、最も注目されてきたのはその意味解釈である。それらの研究において、トートロジー名詞述語文はコピュラ文の特殊例であると指摘されてきたものの、これをコピュラ文として扱うものは極めて少ない。本研究はトートロジー名詞述語文をコピュラ文と位置づけ、西山佑司（2003）におけるコピュラ文の分類に基づいて、主語と述語に来る名詞句の意味構造と文脈特徴を検討してみた。考察の結果、トートロジー名詞述語文は文脈によって「措定文」、「倒置同定文」、「定義文」に分析されることが明らかになった。措定文としてのトートロジー名詞述語文は「物事──属性」という意味構造を持ち、「聴者にある物事が持つ属性に関する共有知識を喚起させて、その物事に対する共通認識を達成する」という文脈特徴を、倒置同定文としてのトートロジー名詞述語文は「メンバー──カテゴリー」という意味構造を持ち、「あるカテゴリーにおけるメンバーはいくら周辺的ものでも、そのカテゴリーから排除してはいけないことを強調する」という文脈特徴を、定義文としてのトートロジー名詞述語文は「概念──定義」という意味構造を持ち、「ある概念について問われた時、何かの原因でその概念の真義を解釈しようとしない」という文脈特徴を、それぞれ備えている。

1. 引言

同語反復作為一種修辭手法，在日常會話和文學作品中常被使用。日語的同語反復根據句中助詞和反復詞的不同，有多種表達句式[1]。本文以由兩個相同名詞短語[2]構成的「N は N_i だ」形式的“同語反復名詞謂語句”（以下簡稱“同語反復句”）為研究對象。同語反復句從形式上看，與系詞句之一

* 本文為澳門大學研究項目 MYRG2012（編號 No. MYRG101(Y1-L2)-FSH12-CFZ）的成果之一。

的「A は B だ」相同[3]，都是名詞謂語句，因此可以將同語反復句看作是由相同名詞短語充當主語和謂語之系詞句的特殊句式。

在日語同語反復句的先行研究中，最引人注目的便是關於意義理解的考察。迄今為止日語研究者從語法學、語義學、語用學、認知語言學、心理語言學等多角度對其意義進行了考察。如安井稔（1978）、樋口萬里子（1988）、小泉保（1990：177）、久保智之（1992）、水田洋子（1995）、佐山公一・阿部純一（1994, 1999）、小屋逸樹（2002）、西川真由美（2003）等等。但是，將同語反復句作為系詞句進行考察的學者並不多見，在筆者見到的文獻中僅有久保智之（1992）和小屋逸樹（2002）。久保智之（1992）參照坂原茂（1990）關於系詞句的分類[4]，將反復詞分為普通名詞、專有名詞和代詞進行了考察，最後指出同語反復句的意義應該解釋成“描寫句（記述文）”[5]。小屋逸樹（2002）首先指出同語反復句具有「差異否定の意味」和「差異強調の意味」兩種意義，再參照上林洋二和西山佑司等人關於系詞句的先行研究，提出系詞句可分為“措定句（措定文）”、“指定句（指定文）”、“同定句（同定文）”、“同一性句（同一性文）”、“定義句（定義文）”等 5 種句式，進而對同語反復句與系詞句之間的關係進行了考察。最後指出「N は N_i だ」句式應解釋為定義句，其中表示「差異否定の意味」的句子也有解釋為措定句的可能性。

以上先行研究中，久保智之（1992）指出同語反復句的意義只能解釋成“描寫句”（相當於措定句），小屋逸樹（2002）則認為應解釋為定義句，並有解釋為措定句的可能性。但從筆者收集到的實例來看，盡管都是一樣的「N は N_i だ」句式，其實根據語境的類型可以分別解釋為措定句、倒置同定句、定義句這 3 種句式類型。本文將基於西山佑司（2003）對系詞句的分類，從關聯理論的角度對同語反復句各種句式的語義結構進行考察，並指出各種語義結構的語境特徵。

2. 西山佑司（2003）關於系詞句的分類

西山佑司（2003:59-188）根據系詞句中的名詞短語是否具有指示性意義，將名詞短語分為“指示性名詞短語”和“非指示性名詞短語”。進而又將“非指示性名詞短語”分為“敘述名詞短語”和“變項名詞短語”[6]。在此分類基礎上，又根據句中充當主語和謂語的名詞短語間的語義結構關係，將系詞句分為表 1 所示的 6 種句式類型。由於本文的研究對象為「N は N_i だ」這一形式的同語反復句，因此在此僅介紹其中的措定句、倒置指定句、倒置同定句、倒置同一性句、定義句 5 種句式。

	A は B だ	B が A だ
1	措定文：あいつは馬鹿だ	
2	倒置指定文：幹事は田中だ	指定文：田中が幹事だ
3	倒置同定文：こいつは山田村長の次男だ	同定文：山田村長の次男がこいつだ
4	倒置同一性文：ジキル博士はハイド氏だ	同一性文：ジキル博士がハイド氏だ
5	定義文：眼科医（と）は目のお医者さんのことだ	
6		提示文：特におすすめなのがこのワインです

表 1　系詞句的句式類型（西山 2003：122）

1）措定句：A 所指代的對象，具有 B 所描述的屬性。

A：指示性名詞短語　　B：敘述名詞短語

2）倒置指定句：由 B 來指定滿足 A 所表示的含有 1 個變項的謂語的值。「A は B だ」可以轉換成「B が A だ」。

A：變項名詞短語　　B：指示性名詞短語

3）倒置同定句：知道所指代的具體對象，但不知道其為何物時，給予相關信息來說明這一類型的句子。A 與 B 之間的關係為：A 必定是滿足 B 所描述的特徵的事物。「A は B だ」可以轉換成「B が A だ」。

A：指示性名詞短語（個別指示）　　B：指示性名詞短語（類別指示）

4）倒置同一性句：在同一句中 A 所指代的對象，必定也是 B 所指代的。A 與 B 具有相同的指示對象。「A は B だ」可以轉換成「B が A だ」。

A：指示性名詞短語（個別指示）　　B：指示性名詞短語（個別指示）

5）定義句：A 為被定義項，B 為定義項。多以「A とは B のことである」「A とは B のことをいう」這兩種句型出現。

3. 同語反復句與系詞句

作為系詞句特殊句式的同語反復句，究竟有哪些類型？它們的使用語境又是怎樣的？這是本節所要探討的問題。同語反復句在形式上與系詞句「A は B だ」句型相同，因此在理論上有可能跟系詞句一樣，可分為措定句、倒置指定句、倒置同定句、倒置同一性句、定義句等句式類型。但是從筆者收集到的實例來看[7]，同語反復句只能分析為措定句、倒置同定句、定義句 3 種句式，不能解釋為倒置指定句和倒置同一性句。

從字面上看，同語反復句「N は N_i だ」表達了 $N = N_i$，即“N 所指代的對象與 N_i 所指代的對象相同”這一意義，這與倒置同一性句的語義結構最接近。但是從實例看，「N は N_i だ」無法解釋為倒置同一性句，其根本原因在於 N 與 N_i 所指不同。這樣一來，解釋為倒置同一性句的話，「N は N_i だ」的意義在任何語境中都無法解釋，倒置指定句也是如此。關於這點，可以看例（1）。

（1）（田治見左衛門は村に逃走してきた武士の 3000 両の黄金を睨んで、村人を神社の前に集めて、皆で奪いに行こうと唆している。亀井だけが田治見の命令に反対している）

亀　井：何ぼあんだの命令でも、俺は反対じゃ。

田治見：なあ、亀井。そういうなら、くじで決めるか。

亀　井：こんなもん、くじで決めるんものじゃねい。人としてやっちゃいてはことじゃ。

田治見：<u>くじはくじじゃ</u>。人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか。亀井のほかに反対する人がおるか。

（金田一耕助シリーズ『八つ墓村』）

假如將例（1）中的「くじはくじ」解釋為倒置同一性句的話，這句話的意義就變成前一「くじ」所指與後一「くじ」所指是相同的。放回到原文中，則變成「くじはそのくじじゃ、人ではのうで、

ほとけのご意志じゃのうか」，很顯然這句話是無法理解的。同樣，如果將「N は N_i だ」解釋為倒置指定句的話，那麼充當主語的名詞短語 N 為含有“wh-疑問句”意義的變項，充當謂語的名詞短語 N_i 則為填充變項的值。其問題也同樣，在於 N 與 N_i 所指不同。也就是說，如果把「くじはくじ」解釋為倒置指定句的話，那麼充當主語的「くじ」就應解釋為「くじはどれかというと」這一變項，充當謂語的「くじ」則為填充變項的值，整句話意義就變成「くじはどれかというとくじじゃ、人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか」，顯然也是解釋不通的。

如上所述，同語反復句的語義結構不可能解釋為倒置同一性句和倒置指定句。那麼同語反復句為何可以解釋為措定句、倒置同定句、定義句？其語境又有甚麼特徵？

3.1　同語反復句與措定句

據西山佑司（2003）對措定句所下的定義，充當主語的名詞短語為指示性名詞短語，可指代可見的具體事物和抽象事物，可以是個體名詞和總稱名詞；充當謂語的名詞短語為敘述名詞短語，用於解釋主語名詞短語所指代事物的屬性特徵。因此，如果同語反復句要解釋為措定句的話，則需要符合以下條件：

1）N 解釋為指示性名詞短語，指代某事物；

2）N_i 解釋為敘述名詞短語，用於說明 N 所指代事物的屬性特徵。

下面結合具體的例子分析考察同語反復句是否有解釋為措定句的可能性。先看上面例（1）。假如將例（1）中「くじはくじ」解釋為措定句的話，那麼充當主語的「くじ」應解釋為指示性名詞短語「くじというもの」，充當謂語的「くじ」就應解釋為敘述名詞短語，以說明「くじ」這一事物的屬性特徵。當然，每種事物都具有許多的屬性特徵，「くじ」也不例外，如：ランダム、予見できない、神意を占う、公平…（隨機、不可預見、占卜神意、公平……）。我們應當理解成哪種屬性，必須要看哪個跟語境具有最大的關聯性。根據 Sperber & Wilson（1995）關聯理論[8]中對關聯性程度大小的規定[9]可知，話語與語境假設之間關聯性程度的大小與語境效果和認知努力有關。推理時所付出的認知努力越少，語境效果越好，關聯性越強。根據「くじ」所具有的屬性，例（1）中的話語「くじはくじじゃ」的語義解釋可形成如下假設集（想定集合）：

くじというのはランダムなものじゃ、
くじというのは予見できないものじゃ、
くじというのは神意を占うことができるものじゃ、
くじというのは公平なものじゃ、
……

要確定具體解釋成何種意義，必須看假設集中哪一項與語境具有最大關聯性，即推理時所需要的認知努力越少，語境效果越好。若將以上各項替換原文「くじはくじじゃ」，結果如下：

くじというのははランダムなものじゃ、
くじというのは予見できないものじゃ、
くじというのは神意を占うことができるものじゃ、
くじというのは公平なものじゃ、
} 人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか。

很明顯，與後一個小句「人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか。」具有最大關聯性的是第三項「くじというのは神意を占うことができるものじゃ」。與其它項相比，所需要付出的認知努力最小，語境效果也是最好的。因此，從例（1）中對話的內容和說此句話的人的意圖來看，在該語境下應當將充當謂語的「くじ」理解成“可占卜神明旨意”這一屬性，整句話的意思就變成「くじというのは神意を占うことができるものじゃ。人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか」。這正好與語境相符合。再看例（2）。

（2）（新右衛門は一休が帝の御子という正体を一休に教えた翌日の朝、安国寺の前の石段階に座っている。その時、一休が出た。）

新右衛門：おっ、これは一休さま。

一　　休：新右衛門さん、間違わないでよ。昨日まで、一休殿って言ったでしょう。<u>お役目はお役目</u>。ちゃんと見張ってくださいよ。

（アニメ『一休さん』）

假如將例（2）中的「お役目はお役目」解釋成措定句的話，那麼充當主語的「お役目」就應解釋為指示性名詞短語，即「お役目というもの」，而充當謂語的「お役目」應解釋為敘述名詞短語來說明「お役目」這一事物的屬性特徵。而在「お役目」眾多屬性特徵中，根據最大關聯原則，在該語境下我們應當將「お役目」理解為「役として責任をもって果たさなければならないこと」，將這一解釋放回原文中則變成「お役目というのは役として責任をもって果たさなければならないこと。ちゃんと見張ってくださいよ」，與上下文和說話人的意圖相符。由此可見，同語反復句可以解釋為“事物──屬性特徵”的語義結構關係，其語義結構關係與措定句一致。

此外，還有一點需要補充的是，當「N は N_i だ」解釋為措定句時，充當主語的 N 一般解釋為總稱名詞，而非個體名詞。假如解釋為個體名詞的話，那麼在 N 的釋意之前就可以加上限定词「この（その、あの）」。那麼上述两个例子中的 N 便可分別解釋為「この（その、あの）くじは」「この（その、あの）役目は」。整句話意思就變成「この（その、あの）くじは神意を占うことができるものじゃ。人ではのうで、ほとけのご意志じゃのうか」、「この（その、あの）役目は役として責任をもって果たさなければならないこと。ちゃんと見張ってくださいよ」。這两句话分別隱含了「神意を占うことができないくじがあるが、これはできる」「役として責任をもって果たさなくてもいい役目があるが、この（その、あの）役目こそ役として責任をもって果たさなければならないこと。ちゃんと見張ってくださいよ」之义，这与常识相悖，與後句的銜接也顯得很不自然。因此，雖然措定句中充當主語的名詞短語既可以是個體名詞，也可以是總稱名詞，但同語反復句「N は N_i だ」中的 N 一般解釋為總稱名詞比較妥當。

當然，並非所有的同語反復句都能解釋為措定句，所以還應當探討當解釋為措定句時，其語境具有甚麼特徵。從例（1）看，不管是田治見還是龜井都知道「くじ」是甚麼，具有甚麼屬性特徵。也就是說話雙方在腦知識庫中都貯存了關於「くじ」的信息，屬於雙方的共有知識。從其意義解釋和說話者意圖上看，田治見是為了喚起龜井和其他村民對「くじ」這一事物的屬性特徵所具有的共有知識從而達成共識，而用了「くじはくじじゃ」這一修辭表達。例（2）也是同樣的道理。因此，當同語反復句解釋為措定句時，其語境特徵可以概括為“喚起他人顯映出貯存於大腦內文化語言知識庫中對某一事物屬性特徵認知的共有知識從而達成共識”。

3.2　同語反復句與倒置同定句

在討論同語反復句與倒置同定句之前，先看看西山佑司（2003）對倒置同定句的闡釋。西山佑司認為倒置同定句的「A は B だ」句式中 A 為“個別指示”，B 為“類別指示”。A 與 B 之間的關係是“名詞短語 B 提供了關於識別 A 為何物、即區別於其他之同定條件的信息”，“A 必定是滿足 B 所描述的特徵的事物。”（西山佑司 2003:171-172）。由此可見， B 是對 A 所指代事物進行描述的名詞短語。通過這一描述以說明 A 就是 B 所描述的事物，而非其他事物。簡而言之，A 與 B 之間的語義結構關係在於說明 A 屬於 B 所描述的范疇的成員，而非是其他範疇的成員。

下面來看看「N は N_i だ」是否有解釋為倒置同定句的可能性。假如可以，那麼充當主語的 N 就應解釋為指示名詞短語，指代會話雙方都能認定的事物；充當謂語的 N_i 通過對 N 進行描述，從而說明 N 就是 N_i 所描述範疇的事物，而非其他範疇的事物。即需要符合以下條件：

1）N 解釋為“個別指示”。指代會話雙方可認定的對象。

2）N_i 解釋為“類別指示”。對 N 進行描述，從而說明 N 屬於 N_i 所描述範疇的成員，而不屬於其他範疇的成員。

如果「N は N_i だ」能滿足以上條件，那麼同語反復「N は N_i だ」在某種語境中就能夠解釋為倒置同定句。

（3）（一休は川で大根を洗っている。その時、新右衛門が通りかかって、一休を「小僧」と呼んだ。一休は腹が立って、新右衛門をからかおうとしている）

一　　休：では、お侍さん、これは何だい。（大きい大根を挙げて）

新右衛門：大根だ。

一　　休：じゃ、この小さいのは？（小さい大根を挙げて）

新右衛門：大人をからかうか。小さくとも大根だ。

一　　休：大きくたって小さくたって<u>大根は大根</u>。だから、小さくたって、坊さんだよ。私は小僧じゃない。

（アニメ『一休さん』）

例（3）中同語反復句「大根は大根」如果能解釋為倒置同定句的話，那麼充當主語的「大根」應當解釋為“個別指示”，即主語「大根」應理解成指代個體事物的名詞短語「この（その、あの）大根は」。在此例中，因前面的「大きくたって小さくたって」表示讓步，強調形體的大小，因此應當將主語「大根」的意義調整為「この大きい大根とこの小さい大根」。充當謂語的「大根」應當解釋為對 N 進行描述，也就是給 N 定一個範疇，從而說明 A 只屬於 N_i 所描述範疇的成員，而不屬於其他範疇。如此，充當謂語的「大根」應解釋為「大根というものにほかならない」。綜上，整句話意義就應解釋為「大きくたって小さくたってこの大きい大根とこの小さい大根は大根というものにほかならない」。這一解釋與前後文及說話人的意圖正好吻合。由此可見，「N は N_i だ」能夠解釋為“成員──範疇”的語義結構關係。與倒置同定句一致。

那麼，解釋為倒置同定句的「N は N_i だ」又是在甚麼樣的語境下使用呢？在例（3）中，一休為了反擊新右衛門對自己稱呼上的不敬，特借用「大根」來打比方。從一休問新右衛門的兩個問題以及最後一句話「大きくたって小さくたって大根は大根」來看，很明顯是為了說明形狀大的蘿蔔是蘿蔔，形狀小的蘿蔔也是蘿蔔，無論形狀大小都屬於蘿蔔這個範疇，而不可能是其他範疇的東西。

換言之，一個範疇裏面會有許多形態各異的成員，既有較為典型的成員，也有較為邊緣性的成員，但不管怎樣都不能夠將任何一個成員排除出該範疇。一休的話語「大きくたって小さくたって大根は大根」正是為了強調說明這一事實。由此可見，我們可以將解釋為倒置同定句的同語反復句所使用的語境概括為“強調某一範疇的成員不管其形態特徵怎樣都還是該範疇的成員，不可將其排除出該範疇”這一特徵。

綜上所述，可以看出同語反復句的措定句和倒置同定句之間的差異。前者是“事物──屬性”的語義關係，後者則是強調“成員──範疇”的語義關係。無論同語反復句解釋為何種意義，它們在句式上都相同，因此我們只能通過所使用的具體語境去判斷同語反復句的句式類型。下面看例（4）。

（4）「おい！とったぞ！」

「小さいなあ」黒谷は近づいて来て言った。

「しかし、とにかく<u>タコはタコだ</u>」

「まあ、夜の酢のものには充分だろう」

「杉山さんは？」

（曽野綾子『太郎物語』）

例（4）中「タコはタコだ」應該解釋成措定句還是倒置同定句，主要取決於該會話的語境。從上下文上看，「しかし、とにかくタコはタコだ」這一話語並非為了說明「タコ」具有“軟體動物、腕很多、會噴墨汁以自衛……”等其中的某一屬性特徵，而是為了告訴聽話者，抓到的章魚雖然很小，但總還是章魚，不會是其他的生物。屬於強調“成員──範疇”的關係和語境。因此「タコはタコだ」在該語境中，應該解釋為倒置同定句。

3.3　同語反復句與定義句

請看下面例（5）和例（6）。

（5）（仁科弘枝(女)と千歳一(男)は恋人同士。仁科弘枝は千歳一より 10 歳年下。飲み会の後、二人は千歳一の家に戻った。）

仁科弘枝：あのう、今日泊まっていちゃだめですか。

千歳　一：（びっくりして仁科弘枝を見ている）…

仁科弘枝：だめですか。

千歳　一：だめ。絶対だめ。

仁科弘枝：どうしてですか。

千歳　一：どうしてって。

仁科弘枝：もう用意してあるんです。

千歳　一：だからだめだって。

仁科弘枝：だからどうしてですか。

千歳　一：10 も違うんだよ。

仁科弘枝：またそれですか。じゃ、どうして私と付き合ってるんですか。

千歳　一：それはそっちが一方的に来たっていうか。断れなかったっていうか。俺、責任持てないから。もし何かあったとしたら、責任持てないから。

仁科弘枝：責任って何ですか。

千歳　一：（消え入りそうな声で）**責任は責任だから**。

仁科弘枝：私、自分の責任は自分で持ちます。

千歳　一：（頭を下げて黙っている）…

仁科弘枝：意気地なし。（言いながら部屋から飛び出した。）

（ドラマ『元カレ』）

（6）子供：姦淫ってなに？

母親：**姦淫は姦淫**。子供はそんなことは知らなくていいの。

（緒方 2006）

很明顯，例（5）中的「責任は責任」並非是說話人為了喚起聽話人對甚麼是「責任」這一抽象事物屬性特徵所具有的認識從而達成共識，或是強調不管怎樣的責任都是屬於責任這一範疇的成員。所以不能夠解釋為措定句或是倒置同定句。關於這點，例（6）更加明顯。孩子對甚麼是「姦淫」這一概念一無所知，所以媽媽的回答「姦淫は姦淫」不可能是為了喚起孩子顯映出貯存於大腦內文化語言知識庫中對「姦淫」屬性特徵的認知從而達成共識，也不可能是為了強調不管是甚麼樣的「姦淫」都是屬於「姦淫」這一範疇的成員。由此可見，例（5）和例（6）中的同語反復句與措定句和倒置同定句有本質的區別。那麼，上述兩例句中的同語反復句應當如何解釋？筆者認為可以解釋為定義句。下面結合例（6）進行分析。

西山佑司（2003:176）指出，定義句是“A 為被定義項，B 為定義項”。假如例（6）解釋為定義句，那麼「姦淫は姦淫」中充當主語的「姦淫」就是被下定義的概念，可理解為「姦淫とは何かというと／姦淫とは」。充當謂語的「姦淫」即為定義，可解釋為「姦淫とのことだ」。那麼整句話則為「姦淫とは何かというと姦淫とのことだ」。放入句中會話就成為例（7）。

（7）子供：姦淫ってなに？

母親：姦淫とは何かというと姦淫とのことだ。子供はそんなことは知らなくていいの。

從前後文看跟說話人的意圖正好相符。因此，筆者認為在該語境中的同語反復句應該解釋成“概念──定義”的語義結構關係，即與定義句一致。下面看看該語境有甚麼特點。

例（6）中，孩子因為不知道甚麼是「姦淫」，所以問媽媽「姦淫ってなに？」，要求媽媽對「姦淫」這個概念下定義。媽媽因為某種原因（如：孩子還太小，不適宜過早知道這個詞的意思；跟孩子說這個詞的意思覺得很難為情等等），無法直接跟孩子解釋「姦淫」的概念，而用了「姦淫は姦淫」來回答孩子的發問。因此，可將解釋為定義句的同語反復句所使用的語境概括為“面對他人對某概念的發問，礙於某種原因不便或是不想直接回答”這一語境特徵。

綜上所述，同語反復句根據其使用的語境，可以解釋為措定句、倒置同定句、定義句這 3 種句式類型。

4. 結語

本文以由兩個相同名詞短語構成的「N は N_i だ」形式的同語反復句為研究對象，首先將同語反復句定位為由相同名詞短語充當主語和謂語的系詞句的特殊句式，然後參照西山佑司（2003）對系

詞句的分類，從關聯理論的角度對同語反復句各句式類型進行了考察，並分析了各句式類型的語義結構及其語境特徵。通過對實例的分析，得到了同語反復句可分為措定句、倒置同定句、定義句 3 種句式類型的結論。其語義結構的解釋，主要取決於該同語反復句出現的語境特徵。當同語反復句使用於“喚起他人顯映出貯存於大腦內文化語言知識庫中對某一事物屬性特徵認知的共有知識從而達成共識”這一語境時，可以解釋為“事物──屬性特徵”語義結構關係的措定句；當使用於“強調某一範疇的成員不管其形態特徵怎樣都還是該範疇的成員，不可將其排除出該範疇”這一語境時，可以解釋為“成員──範疇”語義結構關係的倒置同定句；當使用於“面對他人對某概念的發問，礙於某種原因不便或是不想直接回答”這一語境時，則可以解釋為“概念──定義”語義結構關係的定義句。可歸納成表 2。

句式類型	語義結構	語境特徵
措定句	事物──屬性特徵	喚起他人顯映出貯存於大腦內文化語言知識庫中對某一事物屬性特徵認知的共有知識從而達成共識
倒置同定句	成員──範疇	強調某一範疇的成員不管其形態特徵怎樣都還是該範疇的成員，不可將其排除出該範疇
定義句	概念──定義	面對他人對某概念的發問，礙於某種原因不便或是不想直接回答

表 2　同語反復句的句式類型、語義結構及其語境特徵

參考文獻

Sperber, D. & Wilson, D. (1995) *Relevance: Communication and Cognition*. 2nd Edition.／内田聖二他訳 (1999)『関連性理論―伝達と認知―[第 2 版]』、研究社

今田水穂 (2008)「日本語名詞述語文の記述的分類の再分析：機能論的観点から」、『筑波応用言語学研究』、15

緒方隆文 (2006)「トートロジー：背景化による強調」、『筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要』、1

久保智之 (1992)「日本語の同語反復コプラ文に関する覚書：「時間は時間だ」と「時間が時間だ」」、『福岡教育大学国語科研究論文集』、33

小泉保 (1990)『言外の言語学：日本語語用論』、三省堂

小屋逸樹 (2002)「トートロジーと両義性」、『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』、34

坂原茂 (1990)「役割，ガ・ハ，ウナギ文」、『認知科学の発展』、3

佐山公一・阿部純一 (1994)「日本語同語反復文の意味解釈：反復語および文脈の関わり」、『心理学研究』、1

佐山公一・阿部純一 (1999)「同語反復文の意味はどのように解釈されるか」、『心理学評論』、1
西川眞由美 (2003)「Tautology の考察：adhoc 概念の視点から」、『語用論研究』、5
西山佑司 (1985)「措定文、指定文、同定文の区別をめぐって」、『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』、17
西山佑司 (1990)「コピュラ文における名詞句の解釈をめぐって」、『文法と意味の間：国広哲弥教授還暦退官記念論文集』
西山佑司 (2003)『日本語名詞句の意味論と語用論：指示的名詞句と非指示的名詞句』、ひつじ書房
樋口万里子 (1988)「トートロジーの意味理解」、『活水論文集 (英米文学・英語学編)』、31
水田洋子 (1995)「トートロジーが意味を持つとき」、『言語』、12
安井稔 (1978)『言外の意味』、研究社
何自然、冉永平編著 (2001)《語用學概論》(修訂版) 、湖南教育出版社
李淼 (2003)「日語中的同語反復」、『解放軍外國語學院學報』、2

註

[1] 例如李淼(2003)根據反復詞的詞類，將日語同語反復分為“體言型同語反復”和“用言型同語反復”。體言型同語反復句式包括「N は N 型」「N が N 型」「N も N 型」「N という N 型」；用言型同語反復句式包括「V には V 型」「V こと（に）は V 型」等。

[2] 本文中的“名詞短語”是指廣義上的概念，也包括名詞。

[3] 系詞句有「A は B だ」和「A が B だ」兩種句式。

[4] 坂原茂（1990）基於心理空間理論（メンタル・スペース理論）從語義結構上將系詞句分成三種類型。其中③是②的倒裝句。

①記述文：	A は B だ。	A：個体か属性	B：属性
②同定文：	A は B だ。	A：役割	B：値
③同定文：	B が A だ。	B：値	A：役割（②の倒置）

根據西山佑司（2003:149）中圖（107）可知，上述分類分別與本文表 1 中的「措定文」「倒置指定文」「指定文」相對應。

[5] 如註 4 所述，「記述文」相當於「措定文」。

[6] “敘述名詞短語”又稱為“屬性名詞短語”，是表示事物屬性、特征等的名詞短語。如「モーツルトは天才だ」，句中「天才」即為屬性名詞短語，用于說明莫扎特。“變項名詞短語”是指內部隱含“wh-疑問句”意義的名詞短語。如「花子殺しの犯人はあの男だ」，在理解這句話時，名詞短語「花子殺しの犯人」隱含「花子殺しの犯人は誰か」這一疑問意義，即為變項名詞短語。

[7] 本研究所採用的實例主要是從日本近現代文學作品、青空文庫、相關先行研究論文、電視劇和動漫臺詞（筆者聽錄）等中收集所得。目前共收集到 200 個以上的實例。其中本文所引用的，主要來源於電視劇及動漫的臺詞（如例（1）、（2））、文學作品（如例（4））、相關先行研究論文（如例（6））。

[8] 關聯理論認為，人類的交際是一個說話人的明示與聽話人的推理過程，即明示推理過程。在交際中，說話人的明示交際行為目的是為了讓聽話人明白自己的信息意圖，最終實現交際意圖；而聽話人則應該認為引起自己注意的明示話語具有關聯性。交際雙方希望的就是說話人的話語與聽話人的認知語境之間的最佳關聯。因此，Sperber & Wilson 在 1986 年提出了關聯原則，并在第二版 Sperber & Wilson (1995) 中修正如下：

關聯原則：

第一原則：人類認知傾向於同最大關聯相吻合。

第二原則：每一個話語或明示的交際行為都應設想它本身具有最佳關聯。

最佳關聯假設：

（a）明示刺激具有足夠的關聯性，值得聽話人付出一定努力進行處理。

（b）明示刺激與說話人的能力和偏愛相一致，因而它具有最大關聯性。

（何自然、冉永平（2001：228-236,238-243））

[9] Sperber & Wilson (1995)（内田聖二等譯 1999:151）對関連性程度大小規定如下：

程度条件 1：想定はある文脈中での文脈効果が大きいほど、その文脈中で関連性が高い。（某假設在語境中的語境效果越大，它在該語境中的關聯性就越強。）

程度条件 2：想定はある文脈中でその処理に要する労力が小さいほど、その文脈中で関連性が高い。（某假設在語境中所需要付出的認知努力越少，它在該語境中的關聯性就越強）

室生犀星句の特質について[1]
―劣等感コンプレックス脱出の努力[2]―
Murō Saisei's Haiku Focusing Effort to Dispel Complex

劉 金挙 (LIU Jinju)
広東外語外貿大学 日本語学部教授
Guangdong University of Foreign Studies, Department of Japanese, Professor

Abstract

Murō Saisei, influenced by prevalent haiku writing in his hometown, followed suit in his childhood, an effort to eradicate his inferiority complex by show-off compensation and comforting compensation, which helped lay a solid foundation for his literary career. It is more appropriate to divide his haiku writing into four stages, instead of two as it is traditionally done, from the psychological view and in consideration of haiku's role in his life. In the first stage, his haiku bears noticeable efforts to seek comforting compensation. In the second stage, since the author gained some fame and a long-awaited marriage, there emerged in his haiku more elements of family life and accordingly more efforts to get rid of the inferiority complex. With another round of glorious achievements in novel writing, the author began to pursue feminine and classical beauty in the company of more eager inferiority-eradicating attempts in the third stage. Through the war and hard times in writing, Murō Saisei had realized self-fulfillment and transcendence in the fourth stage. He then popularized his experiences and began to explore subjects like death in pursuit of beauty in ordinary life and classics. The author's haiku writing is a true picture of his journey from seeking to get rid of the inferiority complex to self-fulfillment.

[Keywords] Murō Saisei, haiku, complex, self-fulfillment

はじめに

「俳句にはじまり俳句に終わった」[3]犀星にとって、俳句は、二重の意味において劣等感コンプレックスを解消するための「補償」である[4]。それゆえ、生涯にわたって句作に励んだ彼は、すばらしい句の世界を築き上げた。室生朝子は、犀星の作句と断定したものを、『室生犀星句集　魚眠洞全集』（昭 52　北国出版社）に千七百四十七句収録したのに対して、星野晃一は、犀星全句は、約千八百もあるとしている[5]。

「十五ぐらいの時代から俳句を作っていた」（「河辺の初春」『文章世界』）、「自分が俳句に志したのは十五歳の時である」（『魚眠洞発句集』の「序」）と、幼い頃より俳句を嗜んできた犀星であったが、「二十五歳位から十年間、自分は俳道から遠ざか」（同上）り、「俳句というものは一生に二度は出逢うことのできる、また、二度は出逢わなければならないものらしい」（「発句道の人々」）

と認識していた。二度にわたった俳句との出逢いを感慨深く振り返ったこの話では、一度目の句作は、明治三十六年から大正二年までのことのようで、彼の習作時代と言える。二期目の句作は、関東大震災後の帰郷によって金沢の俳友との旧交に温められ、北声会や中塚一碧楼の金沢来訪の折の歓迎句会などにも出席し、大正十三年初頭から本格的に再開して、ずっと彼が亡くなるまでの間だという[6]。が、犀星の言っているこの第二期は、あまりにも長過ぎてしかも漠然的な区分なので、その内容及びその生涯における働きから見れば、更に細分できないかと思える。

ここで、犀星の小説創作は、幼年三部作をはじめとする第一期と、「市井鬼物」を頂点とする第二期と、『随筆女ひと』をきっかけにして開始した生涯最高の高揚期である第三期、及びその間に挟まれた二つの「沈滞期」という奥野健男氏の五期説[7]を踏まえ、『室生犀星句集　魚眠洞全集』を底本にし、創作時期の断定できるものを対象にして、心理学的立場から犀星の句作生涯を、第一期（明 37～44）、第二期（大 13～昭 8）、第三期（昭 9～13）と第四期（昭 14 年～36）に分けて、戦時下と戦後の区別をせずに、句作におけるコンプレックスを脱出する努力の表象、並びに「自己実現」後の表象を分析することを通じて、その気魄を見てみようとする。以下では分析の便のため、各時期のものをその特徴に基づいて便宜的に更に分類して見ていく（ただ一つの句で重なる要素があるものもあって、ダブル分析するところもある）。

1. 犀星の第一期の句作

「素直さを失った子供というものは人間よりも余計に樹木や動物に心寄せるものであった」（『弄獅子』）。深いコンプレックスを抱いていたせいで素直さを失った犀星少年は、人事を遠ざけてひたすら自然に沈潜し、もっぱら自然に慰みを求めていた。照文の名で投稿した「水郭の一林紅し夕紅葉」（『北國新聞』明 37.10．08）が活字となったのをきっかけに、彼は憑かれたほど多くの句を作り、『室生犀星句集　魚眠洞全集』所収の一期目のものだけでも 560 句もある。

1.1 自然から求めた幽遠

冬枯れや霜美しき藁の屋根　（明 38．12.10）

草木が枯れ、万物はまるで生命力を失ったかのような寒い冬に、藁葺きの屋根に白い霜が飾っている。枯草木の色・屋根の色・霜の色によって織り成された一幅の絵は、静かさ・穏やかさの中に美観を呈している。

これと同じように、「百舌鳥鳴くや夕日燃ゆる公孫樹」（明 39.10・29）、「遠望の残雪白し山の皺」（明 40．03.22）などのように、幽遠という際立った特色は、彼の俳句の底流をなしている。それは、その後の評論・随筆集『芭蕉襍記』に繋がる。

幽遠哀寂を求めるため、「凍る絵筆解く唇や冬の薔薇」（明 41．11.22）、「人を待つ裏戸の闇の藪蚊かな」（明 48．8.27）などの、奇想天外な発想の比喩を用いたものが 50 句ほどある。これは後の犀星の詩作と小説創作に大きな影響を与え、犀星流の比喩のもととなり、後で見るように、芥川龍之介をも敬服させた。

1.2 コンプレックスに由来したもの

少年犀星の自然への沈潜は、決して心に絡んだコンプレックスを忘却させたのではなく、ただ首尾周到で微を極めた自然観察の中に、無垢な心に受けた傷とそれによる孤独感、またそれゆえの現実遊離の願望・コンプレックスから脱出の努力を詠んだだけであった。よって、「照道少年のいらだちの激しさ、そしてそれとは対照的な自然、草木花鳥魚との深いかかわりなどに見る静かさ・穏やかさ」[8]は、彼の句に見出せる。印象深いのは、その中に詠まれた犀星の気持ちと感触である。

身につまされた悲しみ

芳ばしくない出生と悲しい育ちの犀星が、自然からよく感じ取ったのは、悲しみを感じさせる風物であった。

末枯の一軒寒し石の怪　（明 37．11.28）

草木がうら枯れた深秋、怪しい形の石の林に囲まれた一軒の家がぽつんと立っている。その「寒」さは、時期の寒さと人の心に脅えを与えた感覚とを兼ねたもので、なんと寂しくて、人に心の底にまで冷え込ませるような冬景色だろう。

これと同じで、「人を待つ橋の袂や霜白し」（明 39．12.13）、「秋ぢやもの別れぢやものを虫が鳴く」（明 40．9.5）など、いかにも孤独な人の心に浸み込ませるようなものは 70 句ほどあるほか、「菊咲きて貧の晴着も三日哉」（明 40．11.3）、「蚊帳除けて天井の穴懐かしむ」（明 41．10.1）など、生活の貧しさを活写したものは 15 句ほどある。

か弱いものへのいと惜しみ

雨細き若葉の裏の毛虫哉　（明 39．1.18）

寒い風の中、吹いたばかりの若葉の裏にか弱い毛虫が一匹這っていて、身の芯にまで沁み込む寒い小雨を避けている。どれほど可哀相な光景であろう。これと合わせて、虫を描いたものは、十数句ある。「詩人犀星の小動物に対する愛は、天性に負うものでもあろうが、その生育環境に因るところが大きいと考えられる。彼の幼少時の＜あはれ知るわが育ち＞（「寺の庭」）こそ、もっとも身近な生きものとしての＜ものいえぬむしけらもの＞（「夏の庭」）への共感を生み、彼らとの深い絆を育んだのではなかろうか」[9] とあるように、「同病相哀れむ」犀星は、か弱いものへ並々ならぬ関心を寄せ、それへの哀れみ、憐憫を涌かせてくれる。

これと同じイメージのもので、注目の対象から言えば、水中生物（17 句）、雁（12 句）、燕（5 句）、蝿（５句）、鶯（4 句）、鶉（3 句）と、ほかの虫けらや生物を描いた句は 100 ほどあり、何れもか弱いものへぬくもりを注ぎ、その命の弱さを哀れんだものである。「跳んて跳んて跳ひ損ねたる蛙哉」（明 41.5.14）、「斧揮つて入日を戻す蟷螂哉」（明 41.10）、「暮るる戸に離愁思ひは帰雁啼く」（明 42.3.10）などは、代表的なものである。それは、後に中央誌への初めての投稿詩「さくら石斑に添えて」や「川魚の記」（『魚眠洞随筆』所収）、「一冊のバイブル」、「虫寺抄」、「虫かご」（『木洩日』第十章）、「消えたひとみ」、「お天気博士」などの虫題材の小説・随筆を経て、ずっと彼の生涯を締め括る「老いたるえびのうた」に至るまで、犀星文学を貫いた。もっとも、後で分析するように、「自己実現」をなした後、それは、もともとの劣等感コンプレックスからの脱

出努力の現われから、戦時下・晩年の生命への愛惜に変わっただけである。

狭間・あわいに求めようとする救済

馬の耳に蝿冬籠る夕かな　（明 39．11.30）

寒い冬は、か弱い毛虫の命を奪う残酷な時期である。太陽が沈み、寒さが増してきた夕方の頃、一匹の蝿は、馬の耳に逃げ込み閉じ籠り、わずかな命をとり留めようとしている。が、到底救えないというのは、誰にでもわかることである。

コンプレックス脱出の努力は、犀星をして生涯にわたって自己の狭間・あわいを求め続けさせた。犀星初期句には、その狭間・あわいに目を注いだ特色のある作品として、「地の凹へ吹きためられ落花かな」（明 40．5.24）、「団栗や土の凹みに根の凹みに」（明 41.3）、「山崩れにつぶれし村や花芒」（明 41．11.14）などの 20 句ほどある。この感覚は、犀星の「社会、都会の『あわい』に生きる人間の野性的な生き様、或いは哀れな営みを、共感・同情をもって描いた」[10]「市井鬼物」に通じるものである。

宗教関係物への特別な感受性

晩鐘やのそりと出でし月の蟇　（明 39．6.21）

晩鐘が鳴っている頃、のそりと出てきた月は、まるで寺の蟇股にかかっているようである。いかにも清浄な世界であるが、寂しさも漂わせている。寺育ちで、私生児として生まれ、汚れた身を持っていると思い込んだ犀星は、自己救済のため、鐘をはじめとする宗教関係のものにずっと特別な感受を抱き、「純」や「聖」を求めていた。

ほかに「虫鳴くや月を真上の清涼寺」（明 39. 8.31）、「絵馬堂や柱にからむ蔦紅葉」（明 39. 11.17）、「冬の月十字架光る教会堂」（明 44．１）などの 60 句ほどあり、何れも身につまされた悲しみを漂わせている。

1.3 コンプレックスへの照り返し

憂鬱な気持ちに悩んだ犀星は、コンプレックスからの脱出を試みていた。それは、句にも投影している。

ぬくもりや美への憧れと追求

鈴虫の月の都に生まれけむ　（明 41．1.1）

ずっと昔から神様が住んでいるとされてきた月の都で、鈴虫はりんりんと合奏している。どれほど美しくて、ロマンを誘う世界であろうか。犀星は、自分の作品において、その合奏に陶酔したことを度々描いた。コンプレックスからの脱出願望は、犀星にこんな都での生まれを夢見させたのである。

他に、「春の月風温き夜なりけり」（明 40．4.16）などの暖かさや、「探梅や殿はみやびの志」（明 40．2.21）などの美しさを求めるものもあれば、「雛様のやうな夫婦でありぬらん」（明 41．3.28）、「我戀は蠶糸吐く想かな」（明 41．3.26）のように、「雛様のやうな夫婦」や「蠶糸吐く」のような「我戀は」を夢見た句もあるし、「乾鮭に頼母子会や漁師町」（明 42）のようなにぎやかさで自分の孤独を癒そうとする句は 30 句ぐらいある。

憂鬱な気分とそれを紛らす諧謔とユーモア

この胸の憂愁を啖へ貘枕　（明 40．11.22）

コンプレックスに悩んだうえ、頑張っても出世の兆しは見出さずにいる。悪夢を避けようとして獏の絵を描いた札を枕の下に敷いたが、憂愁のせいで依然として眠れない苦しさのあまり、「憂愁を啖へ」という絶叫は抑えられなくなった。

同月の 11 日に、「長き夜の海鳴わたる梢かな」などと、隠しようと思っても隠しきれず、ついに自分の憂鬱で悲憤な気持を口走り、又は赤裸々に吐き出すものもある。が、大部分は、コンプレックスとそれによる憂鬱を、諧謔やユーモアたっぷりの句で茶化したり、面白みのある物事に耽ったりすることを通じて、自己発散を図ったものである。「鉄拳や柘榴の珠の紅に」（明 40. 10.31）、「革命の臍かためたる蒲団哉」（明 41．12.3）などの人の笑いを誘う面白みのあるものもある。もっとも、それだけでなく、「学寮や顔塗られをる昼寝人」（明 40.9）、「わが嘘秋立つ空に響きけり」（明 41．8.24）などの単なるいたずら様子や遊びを描くものもあれば、自虐や悪ふざけのような感じを漂わせるものもある。この類のものは、40 句ほどある。

1.4 読書と文筆によるコンプレックス脱出志向

風邪引いて水涕にうき読書哉　（明 40．12.31）

風邪を引いて、水涕が止めどなくういている。が、出世の念に燃えている少年は、相変わらず読書に耽っている。こんな読書ぶりによってこそ、高等小学校中退の犀星は、後で見るように中央詩壇に登場し、小説界への華々しいデビューを果たした後、日本文学史に一ページを占めるようになった。

この時代、句作によって人並みの人間たらんとする犀星は、読書と句作への励みようが並大抵なものではなく、「時烏苔を削つて句を刻す」（明 40．6.11）、「ちよひ髯をひねれる夜長きの句案哉」（明 41．9.20）など、直接読書と文筆一途の努力を表すものだけでも 25 句ほどある。

2. 犀星の第二期の句作

大正八年『抒情小曲集』などの詩集を出版し、詩壇において確固たる地位を有して、「永遠にやつて来ない女」だろうと念願した浅川とみ子と結婚し、幸せな生活をするようになり、更に大正九年初期三部作の成功によって文壇に輝かしく登場した後、「憑かれたように書きつぐ濫作、小説と詩との間での模索・低迷等が横たわり、波乱と苦悩の時期」・「模索期」[11]、つまり小説創作の第一の沈滞期に陥った。この期間は、普通大正十年～昭和八年までの間、とりわけ大正十四年～昭和八年までの約八年間はそのどん底であるとされている。この短い間、人生の栄光と惨憺、いや大き過ぎたほどの落差を経験した犀星は、「発句道に幽遠を感じたのは極めて最近のことであり、三十歳までなにも知らなかった」（『魚眠洞発句集』の「序」　昭 4・4）とあるように、大正十三年に再開した俳句に、新しい内容と新しい心境を詠み込むようになった。この時期には、約 460 句がある。

2.1 第一期の句作に通じるもの

2.1.1 自然から求めた幽遠

この段階の犀星は、依然として幽遠を求めていて、中には、鋭い観察と自分の独特な感覚によって妙を得た感触を表す句がたくさんある。

鯛の骨たたみにひらふ夜寒かな　　（大 13．8.14）

金沢来訪の芥川龍之介を送別する晩餐後、ふと疊の上に何か鈍く光ったものがあるのに気づき、拾おうとしたら、それは夕食に食べた鯛の小骨であることが分かった。指先を通して伝わった疊の冷たさは途端に夜寒に転して全身に広がってくる。閑静な趣が滲み出たこの秀作に、さすがの芥川も「『鯛の骨』の句は今もなお精彩を減ぜず大兄一代の名作と存候」と頷かずにいられなかった。

勿論、「時計とチューリップと留守なり」（昭 4．03.01）、「芝の雨消えゆく歯朶のあかりかな」（昭 8．07.15）のように、依然として幽遠はその発句世界の底流をなしている。中には、「炎天や瓦屋根が掃く砂埃」（大 14．08.09）、「夏草に天水の風呂沸かしけり」（昭 3．07.18）などの奇想天外な比喩を用いたものは、約 35 句ある。

2.1.2 コンプレックスに由来したもの

身につまされた悲しみとか弱いものへのいと惜しみ

劣等感に由来した身につまされた悲しみとか弱いものへのいと惜しみは、依然として彼の心に絡んでいた。

秋寒き骨となる草見つけけり　（昭 3．08.28）

寒い秋に、花も葉も吹き飛ばされ、残しているのは、骨みたいな草だけである。なんという蕭条した風景であろう。かつて文壇の寵児で、今は文壇に無視されてしまった犀星ならではの触感ではないのか。ほかに「寒竹や埋れる石の蕭条と」（大 14．12.10）、「ふるさとに身もと洗はる寒さかな」（昭 4.04）など、同様のものが 50 句ぐらいある。

きりぎりす己が脛食ふ夜寒かな　（昭 2．11）

寒さに犯されたきりぎりすは、幾日の命を持っているのか。尚更の夜寒を凌ぐために「己が脛食」ったのか。心痛む感がしてならない。この時期にきりぎりすを詠んだものは５句ある。そのほか、日本語には、物事の盛りの時間が非常に短いことの喩えとして、「蛍二十日蝉三日」という諺が使われている。この時期には、蝉（13 句）、蛍（５句）、蝸牛（５句）、ほかの虫けらや鳥（24 句）をも詠んだ。例えば、「春蝉に龍之うつとりとしてゐる」（大 13．05．21）、「すすけむる田端にひらふ蛍かな」（昭 8．07.24）など、か弱いもの・命をいと惜しむ気持ちを詠んだものがある。

狭間・あわいに求めようとする救済

この時期の句には、依然として狭間・あわいに眼を向ける特色がある。

春立つや蜂のはひゐる地の割れ　（昭 5.03）

立春の時、わずかでもぬくもりを吸収しようとして「土の割れ」の中に蜂が這いついている。この生き物のかすかな動きによって、「春立」を描いているようだが、犀星がこの情景に感銘したのは、厳しい現実の狭間・あわいの中に、かすかな安らぎを見出そうとしている小さな生き物の

姿で、感情移入である。

ほかに、「石垣に冬すみれ匂ひ別れけり」（大 14. 04）、「夏菊や小砂利にまじる蝶のから」（昭 2. 10）、「どんぐりは土のくぼみに落ちにけり」（昭 8．01）などの、あまりにも弱弱しく小さく可憐な「冬のすみれ」や「小砂利にまじる蝶」などを発見したりして、それへの愛憐の情けを平明に表現する十数句がある。

2.1.3 コンプレックスへの照返し

初期と比べて、際立った特徴の一つとして、貧困生活に関する描写はなくなり、それから明らかに宗教に由来した感覚を描くものとして「寺の障子朝清ふ澄むさくらかな」（大 13）１句だけとなり、コンプレックスに由来した悲しみなどを込めたものがあるにはあるが、数が少なくなったということが挙げられる。それへの反動として、自然風物への観察はより微細に深入りして、さらに結婚生活などによる心境一変も原因で、むしろ明るみ・温かみ・美を追求するものは絶対多数を占めるようになった。

山茶花や日の当たりゆく軒の霜　（大 15．12.05）

日があたっている中、寒さを凌いで咲いている山茶花と、軒の上についている霜、両者の余りにも対照を成している色の差、それから身に沁みるほどの日の暖かさが活写されている。温かみと美への追求は、人には大きなインパクトを与える。これは、犀星が心の中で温かみを求めている証拠でもあろう。

これと合わせて、「雪に冴ゆる苔の上のあはゆき」（大 13．02.16）、「寒竹の芽の向き朝日さしにけり」（大 14．12.10）、「枯草の中の賑ふ春の雨」（昭 3．03.16）など約 70 句ある。

2.1.4 より一層強烈なコンプレックス脱出意欲

第一の沈滞期に陥り、一度手に入れた文壇地位は失いそうになっただけに、犀星におけるコンプレックス脱出の意欲は一段と高いものになった。そこで、彼は「凧のかげ夕方かけて読書かな」（昭 3．09）、「（売文渡世）墨にじむ我が手ながらも草の餅」（昭 4．03.22）などの、文筆一途の決心を匂わせるものは５句あるが、中々創作の沈滞期を抜け出る兆しがない中、杏に託して、脱出意欲の強烈さを明らかにしたものは多い。

杏による犀星の向上意欲を見る前に、先ず、「小景異情　その六」（『抒情小曲集』）を見よう。「あんずよ／花着け／地ぞ早やに耀やけ／あんずよ花着け／あんずよ燃えよう／あああんずよ花着け」と、強い志を抱いただけに、無名不遇の詩人は、呼びかけ用の「よ」と命令形語尾の「け」とをくり返し用いて、燃えるような花を着けよと、杏の花に対する呼びかけや命令を通じて、切迫した出世の熱望を溢れんばかりに表現している。この杏は、もちろん昂然と挑戦的ですらある犀星本人である。これが原因であろうか、犀星没後の昭和三十九年五月、この詩を刻んだ文学碑が郷里金沢に建設された。

坂をのぼりきりたわわな杏かな　（大 13．09）

長い坂を上りきったところ、いっぱい実って撓んできた杏が目につく。しかも、「そういう生の逼塞感を打ち破るものを渇望している、あるいはそれを可能にする想念を覚えて魂を昂揚させているものとして、坂を登る行為は見直されなければならない」[12] との指摘通り、坂登りは、犀星

文学において上昇志向のシンボルである。「杏の香の庭深いふるさと」（大 13．09）、「ふるさとの杏匂ふや草の宿」（大 14．07.03）などと合わせて、杏に関する犀星句は 18 もある。脱出意欲がいかに強いかが伺える。

2.2 第一期の句作にないもの

芳ばしくない生まれ育ちの犀星だが、とみ子夫人との結婚に恵まれ、家庭を大切にしていた。そこで、この時期の句中には、第一期にないムードを漂わせるものが多い。

2.2.1 家庭生活を後生大事にする気持ち

この気持ちは、以下の句によって現されている。

家庭生活雰囲気を漂わせるもの

松多き家並みの家の温かな　（大 13．02.26）

多くの緑の松に囲まれた家、いかに綺麗でメルヘンチックなものだろう。が、作者の求めているのは、それよりむしろ「家並み」の「家の温」、しかも緑の松のように永遠に続く「家の温」である。私生児の生まれの上に芳ばしくない育ちだけに、結婚後自分の持っている家族を大事にしている犀星の追求と決心である。

ほかに、「柿の実の垂れる屋根をつくらふ」（大 13. 01）、「燐寸買ふ霜ふけし家の蔀かな」（昭 2. 02）、「豆柿の熟れる北窓とざしけり」（昭 3．09）など、家庭生活雰囲気の漂うものが約 30 句ある。

家族への激しい愛

から乳首にねむれるひいなといつれぞ（朝子に題す）　（大 13．02.26）

から乳首を吸わせているうちに眠ってしまった我が娘のあどけない顔と、雛のかわいい顔とを見比べた父親の感動が生き生きと描かれている。

外に、「春日つづき童女のふとり」（大 13．03．01）、「春雨や明けがた近き子守唄」（昭 2.6）、「桃つぼむ幼稚園までつき添ひし」（昭 3．04.27）などの、子供の成長を見つめる親の目差しと、それを喜び楽しむ心とを生き生きと描写したものも多い。

養母と故郷に対する再認識

雪みちを雛箱かつぎははが来る　（大 13．02.18）

人生をいろいろと体験した犀星は、一段と成長を成し遂げ、雛箱を担いで雪道を辿って孫に雛を届けてくれた養母赤井ハツの姿を目にした時、長い間恨みの的としてきた養母へは見直しをせずにいられなくなった。「古雛を膝にならべて眺めてゐる」（大 13．02.18）、「あんずかじるわが母のおとろへ」（大 13．10）にもこの心情が込められている。

大正十一年の五月、犀星はハツを東京に呼び、田端の借家で二週間ほどもてなした。小説「母を招ぶ」（大 11・7）はその一部始終を描いたし、「秋本の母」（大 15・4）や「朝子」（大 12・11）「妻が里」（大 14・９）「母の死とその前後」（昭 3・7）等の小説にもそういった養母への暖かい眼差しは見られる。犀星が三十八歳の時、昭和三年四月二十八日ハツは亡くなった。その直後の昭和三年七月号の『文章倶楽部』に、犀星は「手袋」、「母の死」、「陸橋」というそれぞれ独立した三部からなった「母の死と前後」という私小説を発表し、母への複雑な思いを淡々とした筆致で描いた。

それば かりではなく「干鰈桃散る里の便りかな」（昭 4．04）、「ふるさとやさんまを送る文そへて」（昭 6．11）とあるように、犀星は、故郷それから実家へも見直しをした。それらの見直しは、犀星の「自己実現」への歩みを示している。

生活的・心境的ゆとり

この段階に入った犀星には、生活的にも心境的にもゆとりができていて、日記に書いたものや人間付き合いのための贈句が多くなった。

ざくろちりはてて暑い日（大 13.7．29　日記）

暑くなるにつれて、ざくろの花も散ってしまった。そもそも出版目的ではなく、簡単明瞭で、時期の風物を記したに過ぎない句である。このような物は、全部で 207 句ある。

魚眠洞枯葦たばね焚きにけり（大 13.12．27　芥川龍之介宛）

寒さを凌ぐためか、魚眠洞と自称する犀星は、枯れた葦を束ねて焚いてしまった。やはり簡単明瞭で、単なる日常生活を友人に知らせるためのものである。全部で 85 句ある。

2.2.2 女性美追求の兆し

犀星文学は、「独特の女性美学・人間学にまで昇華」[13] したものだと言われている通りに、犀星は、第二の小説創作期には女が正体たる「市井鬼」を、第三の高揚期には古典美のある女性を多く創作した。これは、この時期の俳句世界に既に兆し始めたと思える。例えば、

涼しいかぜに瞳をほそめた女　　（大 13．7．29）

涼しい風に吹かれ、一人の女は、何かを憧れ瞳を細めて眺め求めているかのように快く過ごしている。同様の句は、ほかに「膝やせし女とかたり冷かき」（大 13．9.14）、「魚さげし女づれ見し寒さかな」（昭 3.9）など 4 句がある。数こそ少ないが、兆しとして絶対にむしできないものである。

3. 第三期の句作

長い沈潜後、かつて美化と抒情性を武器にした犀星は、いよいよ強烈な脱出意欲を抑えきれなくなり、「市井鬼」と呼ばれる人物への描きを通じて、赤裸々に自分のコンプレックスを叫び出すようになった。この時期のものは、200 句である。

3.1 第一、二期に通じるもの

3.1.1 自然から求めた幽遠

涼しさや水苔滴れる筧口　（昭 10．08．11）

水滴は筧口を垂れて水苔の上に滴っている。水の滴りは音を出すはずだが、水苔によってそれが遮られた。常識中の音と現実中の静、夏の暑さと水がもたらしてきた涼しさ、いかに幽遠な世界だろうか。

この間、このような特徴の際立ったものが、約 100 句ある。中には、「（朝鮮）春の山駱駝のごとくならびけり」（昭 12．06）、「てつせんの花彫りゆくや梅の花」（昭 10．07）、「星と星と話してゐるそら明かり」（昭 10．6）など犀星流の感受性の強いものもたくさんある。

3.1.2 コンプレックスに由来したもの

（帰庵）寒ぐもる下枝くぐれる雀かな　（昭 9．03）

曇っている寒い冬のある日、帰庵しようとした作者の目に、下枝をくぐっている雀がついた。この可哀相な雀は、寒さにビクビクしていたに違いない。この光景は、コンプレックスに苛まれた犀星には、どんなことを連想させたのか。

ほかに、「しらかばにせみひとつゐて鳴かずけり」（昭 10．6）、「煤よごる蝶斑白や丸の内」（昭 10．11）などのように、蝉（６句）、きりぎりす（２句）、蝶（２句）、いとど（２句）、蠣（2 句）とほかのもの（９句）がある。

が、第二期の句作と比べると、「（寒）寒餅や埃しづめるひびの中」（昭 10．6）のような、狭間・あわいに求めようとする救済を表すもの（５句）、「あはゆきの寺々めぐりやつれけり」（昭 9. 03）のような宗教関係物への特別感受を描いたもの（４句）は少なくなり、身につまされた悲しさを描く句もほとんど見られなくなったことは、犀星の生活も心境も一段とよくなったことを物語っている。

その反面、この時期には、美・希望・明るみなどを描くものが多くなった。

藁屋根に斑ら雪見ゆ梅の花　（昭 10．6）

藁屋根に所々に点在している残雪は、まるで梅の花に見える。この時期に入った犀星は、もう十分に生活の中から美を見つけたり、自分の希望や明るみを探し出したりするようになった。「ひるふかき青梅が黄にそまりゆき」（昭 9．08）、「はれあがる雨あし見えて歯朶あかり」（昭 10．6）と合わせて、21 句ほどある。

3.1.3 文筆一途の決意とコンプレックス脱出の赤裸々な努力

（短夜）小説の鬼に憑かれて明け易き　（昭 10．07）

「市井鬼物」によって第二期の小説創作を開始した犀星は、「小説の鬼に憑かれ」たみたいに、書くのに没頭して、また一晩を明けてしまった。文筆生活と関係のあるものには、ほかに「明けやすきわがものがたり衢」（昭 10．6）などの４句がある。

それから、犀星は、「つゆぞらや杏にほへる廂越し」（昭 9．06．15）のように、杏（６句）、魚（4 句）、ほかの向上イメージのもの（5 句）を描くことを通じて自分のコンプレックス脱出の努力を表している。

3.1.4 生活的・心境的ゆとり

この段階になった犀星の余裕は、以下の二つのことによって表されている。

一つ目は、遊び気分のものが多くなったことが挙げられる。

「りり子さんおだいぢになされ夏休み」（昭 9．07.23）、「（靴）靴音はをんならしくも霜夜なる」（昭 11．03）」など、何れも解釈要らずの、遊び半分な気分を表すもので、合わせて 15 句もある。

二つ目は、前と同じように、贈句が多いことである。

ぼろぼろの机かひけり梅の花　（昭 9．02.26　小畠貞一宛）

なぜぼろぼろしたこの机が気に入って買ったのか。このぼろぼろした部分は、梅の花に見える

のが原因であろうか。甥へ自分の近況を告げようとする犀星は、美への追求を怠っていない。これと同様に、「行春や版木の残る手毬唄」（昭 9．06　福田蘭童と竹村俊郎宛）などの贈句は、計４３句ある。何れも近況の知らせや贈物への感謝など、生活的な温かみに満ちたものである。

3.1.5 家族への暖かい愛情

家族、とりわけ我が子への愛は印象深いものである。

春あさくわが娘（こ）のたけにみとれける（昭 10．03）

この句について、川端康成は次のようなすばらしい鑑賞をしている。

父犀星さんの一人娘にたいする、よろこび、ねがひ、また、おどろきが現れてゐる。この句の季節は「春あさく」でなければならないやうだが、あるひは、娘朝子さんの名を一句のうちに詠みいれたい、父の愛もこめてあるのかもしれぬ。（中略）「わが娘のたけ」のたけは象徴の意味を帯び、身のたけとは限らなくて、心のたけ、人柄のたけ、才質のたけに読み取ることもできるやうである。

現に、「室生さんは娘朝子さんを一人の文学者、作家として認めようとし、その成長を切に望んだのであった。」[14]

ほかに、「子供らや墨の手あらふ梅の花」（昭 10．6）などの、子供の成長を見守るものもあれば、「紅波甲や凪ぎしみやこも北の海」（昭 11．03）と、金沢の家兄への見直しや、「（麓か）靴みがきうららかに眠りゐたりけり」（昭 10．6）など、生活雰囲気を漂わせるもの（３句）もある。

3.2 新しくできた特徴

3.2.1 「女ひと」への追求

「夏の日の匹婦の腹にうまれけり」（初出未詳）と、欠けた母愛をコンプレックスの根源にした犀星は、終生補償としていろいろな女の人間像を形作ってきた。

発句のなかに女人のことが余り取り扱われなかつたが、（中略）不倫や恋や、ふしだらな恋愛沙汰は発句にならないが、その純粋な気持からはいって行った恋愛や、その空気なれば、これは今までに拓かれなかった境致でもあるから、どんどん開いてゆくべきである。（「発句道の人々」（『俳句研究』昭 9.3 月号）

と、自ら述べたように、第一期の句作に書かなかったが、この時期に入って「ずば抜けた新しい傾向を持つた」（同上）句作の方法を探索するという意味を兼ねて、昭和十年一月から三月までに、犀星は、それぞれ「近詠」（２句）、「梅」（3 句）、「ふゆのよは」（４句）、「紅梅」（2 句）、「春の夜」（4 句）、「巷」（3 句）、「朧」（４句）というテーマで、「梅折るやめのふのごとき指の股」（昭 10．2）、「春あさく巷（まち）の女（め）ながら摘むものか」（昭 10.3）などのように、「女ひと」の存在そのもの、そして姿態、匂い、または「女体」の指の股、えくぼ、あご、瞳、頬、膝、乳房、えりあし、脚など、所謂「女体」の部分的美の魅力を訴える一連の句、極端に言えばフェティシズムの俳句世界を作り上げた。

これらの句を理解するには、この時期、犀星文学全体の流れは「あにいもうと」（昭 9.7）を境に大きく変化した、所謂第二期の小説創作が始まったことを考慮に入れなければならない。つまり、この一連の句の世界が、「市井鬼物」、「衢」の文学という犀星文学の新生面に深く関わってい

る。そこで、「半身を自然の静寂の中において幽遠な美、あわれの世界をつくりあげ、一方、半身を巷の雑踏の中において人間臭い愛惜、復讐の世界を描き出」すという犀星文学の「二面性と同質のものが、」「珈琲はこぶ女ながら胸の乳房ぶくれ」（昭 11.3）などの「俳句の中にも存在していた」[15] という指摘がある。

3.2.2 古典への沈潜

この時期における犀星の古典への沈潜は、二つのことによって表されていると思う。

先ず京都によって体現されている「古き世の顔」である。

（祇園）古き世の顔も匂ふや松の内（昭 9．03）

古代の趣を漂わせている祇園辺りは、門松を飾っている正月になると、より一層古代的ムードを匂っている。この雰囲気に浸った犀星は、古典美、とりわけ女性美を偲んでいるに違いない。そこで「（七条にて）来てみれば旅籠の庭もしくれたり」（昭 12．01）のように京都の旅籠の庭からでも特別な感受を得たり、「（桂離宮拝観）すぎ苔のにしきを織るよ秋の水」（昭 12．01）のようにロマンチックな感想を抱いたりしていた。京都に古典美を求めた物は、合わせて 7 句ある。

それから中国から求めた古典美である。

昭和十二年四月十八日～五月六日の間に『朝日新聞』社の要請に応じて、犀星は生涯唯一の外国旅行、中国東北地方への旅に出かけた。中国への旅は、ある意味から言えば、芥川龍之介の中国への旅と同じで、犀星の古典美への追求行為である。

ほそぼそと荒野の石に芽ぐみけり　（昭 12．05.26）

哈爾濱に向かう途中、まだ寒い中、蒼茫とした荒野の石の上に細々と草が芽ぐんできたのが目についた。現実中国に全然古典美を見つけ出さない犀星にとって、これはいかに美しい明るみであろう。ほかに「いつしかに旅順の菫匂ひけり」（昭 12．05.26）など 4 句ある。

4. 第四期の句作

昭和十三年より、犀星は小説創作の第二の沈滞期に入った。おりしも昭和十二年九月十八日、「柳条湖事件」が発端たる中国への侵略戦争、さらに十六年十二月八日太平洋戦争への突入によって、文学全般に対する国家統制が強化されてきた。「避戦」[16] した彼は、二十四年の随筆集『泥孔雀』を世に問うて以来、ずっと昭和三十年二月に作品集『黒髪の書』が出るまで、七年間も一冊の新刊本もない。が、長い沈滞期に色々な人生体験をした彼は「自己を通して、自己の感覚を通して、自己の生活、経験、自己の思考を通してある一般者にたどりつ」[17] き、「自己実現」を成し遂げた。この時期には、約 502 句ある。

戦争は、犀星の文学創作に二つの影響を与えた。

一つ目は、か弱いものへの愛惜である。

戦争の泥沼に陥るにつれて、幾多の尊い命が惜しげもなく犠牲にされた。従来の弱いものへの同情に加えて、昭和十七年五月相次いで親友朔太郎と佐藤惣之助に死別した事件は、犀星に大きな刺激を与えた。こんな状況のもとで、犀星は一連の生命の尊さをテーマにした文学作品をまと

め、命を見つめ直していた。

二つ目は、古典への沈潜である。

戦争が激しくなるにつれて、国民のアイデンティティを強め、それをもって国民の団結を維持・強化するため、日本政府は、「皇紀二千六百年」に当たる昭和十五年を記念する国家的行事を催した。これを機にし、国粋的な伝統が重んじられ、古典の価値も再認識され、それに対する関心もかつてないほど高まってきた。皮肉なことに、自ら芭蕉を師とし、幽遠を追求して『庭を造る人』、『芭蕉襍記』などにおいて伝統美を探り続けた犀星の古典への執着は、この時代の政治的要請に交差点を作ってしまった。戦時下と戦後、俳句を含め、犀星は古典美に沈潜した一連の作品群を創作した。

この間に彼は多くの俳句を創作し、昭和十八年には百二十句という量にも達した。が、戦争を讃える作品が見当たらないのは注目に値する。

4.1 第一、二、三期と通じた特徴

4.1.1 自然から求めた幽遠

風のない涼しさよしんと葉波立ち（昭 14．07）

微風もない日だが、しんとした緑葉は、人に涼しさを伝えきて、まるで波を巻いているようである。「しんと」という言葉によって表されている静と、「葉波立ち」という言葉によって表象されている動との差によって、人に涼しさを与えている。いかに幽遠なものであろう。それだけではなく、「冬ごもる人ごゑきこゆ枯れ木越し」（昭 16．10.18）、「風鈴に金魚もあはれ人の家」（昭 23．07．13）などのように、幽遠を求めた俳句は、依然として彼の句の底流をなしている。

この時代に入った犀星は、沈滞とりわけ戦争の陰影にいながらも、平凡なものから美を見出したり、諧謔たっぷりで過ごしていこうとすることができるようになり、戦時下の息苦しい生活の中から明るみや希望を見出している。

新年の山深く歯朶はみどりなる（昭 14．6）

新年に入ったばかりでまだ寒さが厳しい中、山奥の歯朶はもう緑色に変わった。どれほど人に希望を与えた新年であろう。これと同様の、「赤松のはだもつやめく春日かな」（昭 14．04）、「菊生けしがままに立つや山の家」（昭 34．09.23）など、約 70 句ある。

4.1.2 か弱いものへのいと惜しみと蘇った特別な宗教的感受性

か弱いものへのいとおしみ

手にとりてあはれとおもへ蝉の傷　（昭 30．07.07）

傷を負った蝉を手にした犀星の凝視の目には、その可哀相なか弱いものへの哀憐の感情を込めている。戦争が終わったとは言え、あの悲惨な経験が彼の心に絡んだに違いない。

戦時下の体験もあって、犀星は自分の目をか弱い虫けらに向けて、数多くのものを書いた。中には、「夏の日よ蝉透いて君見ゆる」（昭 18. 08）、「みんみんの声山越えて夏も終わり」（昭 34. 09.13）のように蝉（16 句）、「竹の葉に虫つく秋の日でりかな」（昭 23．07．27）のように無名の虫（11 句）、「（行春）行春や川波のこる蝶一つ」（昭 24．08）のように蝶（９句）、「いとどらは良き名ならずや秋日宿」（昭 13．08）のようにいとど（4 句）、「庭の梅椿は散りはじめ蟻がはひでた」（昭

16．03．11）のように蟻（３句)、こおろぎ（３句)、蜻蛉（３句)、蛍（3 句)、ほかには蝿、蜂などの動植物（20 句）を描いた句がある。

戦時下にはすでにこの傾向が現れてきたが、昭和二十一年以降、犀星の俳句には、かつての悲しみや悲痛を訴えるものはずっと少なくなるのに対して、平平淡淡なものと、中から希望を見つけ出し、喜びや嬉しい気持ちを表すものは多くなってきた。「春雨や朽木にやどる蝶一つ」(21. 6)、「菊生けしがままに立つや山の家」（昭 34．9．23）などの 9 句が挙げられる。

この時期の俳句の創作は、「自己実現」を成し遂げた後の犀星の三期目の小説創作と同じものである。犀星句の変化に関して、第一句集『魚眠洞発句集』は「自然の風物を静観し、凝視し、幽遠の情趣を探ることに心を尽そうとする。（中略）自然の風物を詠んだものが多く、身辺即事風の句が少ない。」そして、第二の句集「犀星発句集」は、「特に著しい変化はない。清閑な句境、隠微の情趣を描こうとする方向には変わりなく（中略）淡淡たること水の如く、無色無味に近いと思われる句が多くなり、中には趣味的な自己耽溺に陥った句も見られる」のに対して、第三の句集『犀星発句集』は「人間的な、生活的な、いわば風俗的な方向への近寄りを見せ」[18] ものであるという指摘は、的確なものである。

蘇った悲しみと宗教的感受性

沈滞期、さらに戦時下という特別な時期だけに、人生の栄光と惨憺を繰り返して経験してきた犀星でさえ、かつて弱まっていた身につまされた寂しさ、悲しさは蘇ってきた。

繭の中音しづまりて秋しくれ　（昭 26．09.09）

時雨が降る時期に、生命力のある繭でも中の音が静まってきた。この「音」と「しづまり」との対照によって、秋の冷たさはしんとして人の心に伝わる。同類のものとして、「あしの皮剥ぎおちる冬の深みけり」（昭 14．02)、「芽のまがり去年の瓦のつまれけり」（昭 14．04）など、20 数句がある。

石ほとけ寺よりかりて冬の苔　（昭 18．08）

被っているこの冬の苔から、既にこの石ほとけは長らく家に置いたと推測できよう。戦時下どんな目的で寺から石ほとけを家にまで借りて、長く祭ったのか。寺や仏とりわけ地蔵様に特別な感受性を抱いた犀星にとって、相変わらずそれにより救いを求めていたことが分かる。この時期に宗教による特別な感受性と関係のあるものは、「鬼が島に百合冴えわたり夏書かな」(昭 33. 07.10) など、合わせて 10 句ほどある。

が、第三期の句作と同じように、かつての狭間・あわい感覚はあるにはあるが、「日にやけしをとめづれ見ゆ壷すみれ」（昭 19．05)、「(頃日）垣根結ぶ埃もぬくき菫かな」（昭 20．06.05）と、僅かな物である。

4.1.3 家族への根深い愛情

生きのびし人ひとりゐて冴え返る　（昭 14.2）

春待や生きのぼし人の息づかひ　（昭 14.2）

春待やうはごとまじる子守唄　（昭 14.2）

昭和十三年、脳溢血にかかって、半身不随になった妻を看病し、その命を生と死のすれすれの

境で見つめた時、犀星は妻への深い感情に溢れたのである。命を取り留めた妻の、病床での「うはごとまじる子守唄」を聞いた俳人は、心がどれほど痛くて、悲しいものであったろう。昭和三十四年十二月「かげろうの日記遺文」で野間文芸賞を受賞した犀星は、その賞金百万円を、軽井沢に自分の文学碑を建立することと、室生犀星詩人賞を設定することと、とみ子夫人の遺句集を刊行することに使うと決めた。それだけではなく、犀星は、小説「告ぐるうた」や随筆「生きたきものを」を書き、妻を哀惜したのである。

うた告ぐるひともあらなく夏あはれ　（昭三十五年九月四日　丸山泰司宛葉書）

昭和三十五年軽井沢矢ヶ崎川畔に文学碑建立の土地を選定した時の句である。翌年犀星は、「切なき思ひぞ知る」を刻した文学碑を完成し、その下にコンクリートで固めた穴を作り、そこにとみ子夫人の分骨を納めた。犀星はそこをとみ子夫人の鎮魂の場としただけではなく、自らの墓所とも考えていたのである。

それから、わが子へも限りない愛情を注いでいた。

長女の朝子が女学校を卒業した時、父としての犀星は、深い感慨を抑えきれず、

さくら木にさくら一杯につきにけり　（昭 16．03）

幼稚園にてはきしが靴をながめてゐる　（昭 16．03）

と、「さくら木にさくら一杯」という句から、喜びに充溢したその心が読みとれる。幼稚園に通っていた時期の娘の穿いた靴を眺めた犀星は、その気持ちは決まって複雑なものである。そのほかに、「日短き道にひらひぬ子供本」（昭 18．08）など子供の成長に関連した句もある。

短日や藪をひらいて家の建つ　（昭 18．08）

枇杷の花ちぢれる家を越しにけり（昭 18．08）

「善は急げ」、大事な家族の健康と幸せのために、寒さを畏れず、急いで藪を開いて家を建てて、「枇杷の花ちぢれる」晩夏を迎えるとともに、新しい家に引っ越していた。家族への愛は、どれほど強いものであったろう。

ほかに、「余寒朝々の粥すする弱りかな」（昭 15．03）、「縫ひものや小言くやしく萩を見る」（昭 23．08．28）、「行春やもうけぬ客と晝の飯」（昭 24．04.29）など、日常生活を匂わせるものは、合わせて 70 句ぐらいある。

4.1.4 生活的・心境的ゆとり

生活的とりわけ心境的ゆとりから、犀星は、「縞ふかく朱冴え走る南瓜かな」（昭 16．10）など身辺から美を見つけ出した句や、「なむあみだぶつ菜の花は莢に入り」（昭 17．04．06）など、諧謔たっぷりのものを 30 句書いた。

が、彼のこの時の心境的ゆとりをもっとも物語るのは、依然として日記に書いた句や贈句が多いことである。

もの思ひ炭をふたつに折りにけり（昭 23．4.29　日記）

平明で分かりやすいこの句は、「もの思ひ」に耽って、手に持っていた「炭をふたつに折」ったことを面白半分に言っている。このような句は、とりわけ昭和二十二年より多くなり、全部で何と 160 句にも達した。

たまかぶら玉のはだへをそろへけり（昭 16．3.11　竹村俊郎宛）

つややかな白さを持つ蕪は、まるで若い娘の肌に見える。犀星流の表現で俄かに清純な抒情を匂わせることによって、竹村から届けられた蕪のみずみずしさを褒めて感謝の気持ちを表している。これと合わせて、「蕗の薹径は小さき寺に入る」（昭 22．03．11　乾直恵宛）、「靴音の記者は乙女か夏めける」（昭 29．05.25　小島喜久江宛）など、計 103 句にも達した。

このように、この時期の犀星は、平常心に至り、日常生活や生活中の感想を淡々と物語るようになり、とりわけ晩年の句は、ほとんど日記に書いたものであるか、人への贈句であった。

4.1.5　文筆一途の努力

沈滞時にしても第三の高揚期にしても、ジャンルや題材に構わず、犀星は引き続き一途に創作を堅持し続けてきた。

余寒日日小説つづりゐたりけり　（昭 15．03）

まだ厳しい余寒の中、売れなくても作者は日々小説を綴っている。なぜなら、文学創作は、もはや彼の生命の一部になりきったからである。そこで、「行春や渡世の文もいきづまり」（昭 24．04.28）であっても、矢張り頑張り続けたのである。合わせて 17 句ある。

が、見てきたように、この時期の創作は、前の切迫したものではなく、落ち着きのあるものになってきて、平平淡淡に物語るようになったものである。

新しくできた特徴

長い戦時下、犀星文学には、以下の特徴ができた。

１．「避戦」と老いや死への凝視

長い戦時下、それから年をとるにしたがって、死を多く目にした犀星は、戦争に対して独自な処し方を持ち、老いと死を凝視するようになった。

「避戦」しようとする気持ち

（戦ひ）戦ひの庭はき清め居りにけり　（昭 17．03）

戦時下、「戦ひの庭はき清め」という行為は、宣伝によって熱狂した当時の日本の国民の目にいかに映ったのか、滑稽でしかないと思われる。

このように、「避戦」作家である犀星は、「かちどきの餅つき居れば日はのぼり」（昭 18．08）など戦いに関わったものは１７句もあるが、直接戦争を謳ったものは一句もない。

老いや死への凝視

杖ついてありくは人はかげろうか　（昭 27．06.29）

多くの死を目にした犀星も、いよいよ年をとって、杖を突いて歩くようになる。この段階になった彼は、思わず成虫は寿命が数時間から数日しかないはかないものの例えとされた蜻蛉を連想したのである。

この時期に「里にいるや鶯老いて人もなき」（昭 27．08.16）、「山峡に人の住みゐるて死なずけり」（昭 36．07．20）など、老いや死への凝視の句は、合わせて 15 句ぐらいある。

4.2 沈滞時の憂鬱な気分とそれを打破する意欲

この時期の犀星は、「自己実現」を成し遂げ、かつてコンプレックス脱出の努力の形象として

いた杏や魚などに精神的支えを求めると同時に、日本の伝統美を引き続き求めていた。

杏と魚に求めた精神的支え

その文学創作の沈滞期において、犀星は、依然として杏や魚を描いたものを多く書いた。

日のぬくみあんず頬にあてて居りにけり　（昭 23．04．26）

杏を頬に当てて、日の温みを感じ取ろうとする。このように、コンプレックスの補償を求めてきた犀星は、かつて強烈に燃えた向上心がなくなり、むしろ杏を苦難生活を生き抜くための精神的支えにしていた。この時期に「花杏はたはたやけばかすみけり」（昭 16．04）、「杏はつぼみがよし愛でにけり」（昭 30．05）など 23 句もある。ついでだが自分の生涯を総括した犀星名作も「杏つ子」である。

ほかに「燃えきりてたまゆらの海に消えにけり」（昭 34．07.14）のように「蜜のあはれ」に出た金魚を髣髴した魚を描いた句や、「鯛の眼のかなでる波の春めきて」（昭 28．08.20）の落ち着きの中に美を漂わせる句など、合わせて５句ある。

日本美への追求

生涯幽遠を追求してきて、長い沈滞期、とりわけ戦時下にずっと古典美を追求してきた犀星は、この時期になって、古典的女性や趣を通じて、日本美の究極を追求していた。

（菊）しみじみと思ふ菊白き日本　（昭 18．08）

「菊花紋章」から皇室の代名詞とされた菊に対して、「避戦」していた犀星がしみじみと思うのは、決して戦争への支持ではなく、日本の伝統的美への追求なのである。彼の「王朝物」はもっともこれを物語っているが、俳句にも表れている。例えば「日本の頬うつくしや菊の前」（昭 18. 08）などの風物を描くものは 15 句ほどで、「冬日暮れ女ひとり行き絶えにけり」（昭 18．08）など古典美の担い手としての女を描いた句は 10 句ほどある。

おわりに

「なぐさめ補償」と「見せかけの補償」を求めるべく、句作を開始した犀星少年は、自然を友にし、句作を通じてコンプレックスから脱出しようとして、自分の向上志向とその努力を詠み込んだ。が、そのあまりにも切迫した意欲に貫かれたせいもあって、見よう真似ようの第一期の俳句には、身につまされたものだけを取り入れたきらいがあり、「さまざまな方面から、新しい素材を盛」ることはできず、彼のコンプレックスに由来した特別な感受性や気持によるものが多かった。「幾度か新しくなろうとして失敗し」（『犀星発句集」の「序」）てしまった犀星は、「発句道の奥の奥をねらひ、奥の方に爪を掻き立て、耳を欹てる思いがし」ていながらも、「実際はまだ何も解っていない小僧」、「真実の発句道に思いを潜めるよりも、むしろ一介の作句人たるに過ぎ」（『魚眠洞発句集』の「序」）なかった。

第二期の句作期に、文壇の一角を陣取った犀星には、直接に自分のコンプレックスに由来した特別な感受性を表すものが少なくなったが、第一の沈滞期だけに、この脱出意欲はいっそう強烈なものとなった反面、幸せな家庭生活に恵まれ、かつて怨恨の対象とした養母や故郷への見直し

をし、幸せな家庭生活、日常生活を大切にしているとともに、平凡から美を見出すように努力し、女性美への追求も兆しだした。この時期に蓄えてきた力は、その後、女性美追求の一方式として、「市井鬼」に突破口を見つけた。

その後、安定した幸せな家庭生活に恵まれていて犀星は、だんだんと美化と抒情を捨てて、何をも憚らぬ「市井鬼物」によってコンプレックスを脱出しようとするようになった。が、赤裸々な努力もしたにはしたが、生活的・心境的余裕ができたゆえ、幽遠の世界、とりわけ女性美と古典美にも沈潜していき、晩年の古典美を兼ねた女性像を塑造する基礎を築いた。それゆえ、第三期の句作は、第二期の小説と同様に女への持続的な追求を引き続けた。が、最も重要なのは、生活的・心境的ゆとりができて、女性美と古典美にも沈潜していったことである。

最後に、小説創作の高揚とどん底を繰り返し経験し、人生の栄光と惨憺、とりわけ戦時下という特別な経験をし、多くの親友に死なれた犀星は、自分の尋常ならざる出生や成長などを全て普遍化、社会化することに成功して、コンプレックスの解消と「自己実現」・「超越」を成し遂げたところ、老いと死を真正面から凝視し、第四の句作期に入り、「市井鬼物」のリアリティ・迫力・野性と古典美とを止揚・統合し、理想中の完璧な女性像を作るようになったと同時に、人生を真正面から凝視するようになり、平凡から美を見出したゆえ、俳句全体の雰囲気は落ち着き、穏やかになり、永遠な美を追求するようになったのである。

このように、犀星句から、「自己実現」・「超越」に向かって一歩一歩と進んでゆき、最後に成し遂げたに至るまでの犀星の努力とその人生の歩みが読み取れる。それゆえ彼の俳句は、「多少人間をつくる上に、何時も落着いた修業」であり、「古風でなければならぬ詩的精神」を帯びながらもいつも「新鮮であ」（『魚眠洞発句集』の「序」）ったわけである。

脚注

[1] 自著『自己実現・超越の室生犀星文学』（龍書房）は本稿をもとに加筆し出版の準備を進めていたものですが、本稿の『アジア日本研究』への投稿後 2012 年 8 月に先に出版されました。

[2] 室生犀星のコンプレックスについて、『室生犀星研究』と『神戸女学院大学論集』発表の一連の拙稿参照。

[3] 室生朝子「あとがき」、室生犀星著、室生朝子編（昭 52）『室生犀星句集　魚眠洞全句』、北国出版社

[4] 詳しくは拙稿「犀星文芸の母胎たる句作について」『神戸女学院大学論集』第 164 号参照。

[5] 星野晃一（平 12）『犀星句中遊泳』、紅書房、325

[6] 『室生犀星句集　魚眠洞全句』でも明治四十四年一月の『薬事評論』掲載の代作五句を最後に、ずっと大正十二年までの間は空白である。ただし「草の上にて」（『文章倶楽部』　大 9.8）に、九年五月の帰郷の際に句作記録があるし、「芥川君と僕」（『天馬の脚』　昭４）にも「自分は久し振りで発句を作つた」とあるから、この間にも少数の句作があると思われる。

[7] 詳しくは、奥野健男「室生犀星入門」室生犀星編著（昭 61）『室生犀星評価の変遷』、

三弥井書店）参照

[8, 5] に同じ、300

[9] 三木サニア（平 7）「室生犀星の児童文学（十）――『動物詩集』の世界――」、『方位』第 18 号、116

[10, 5] に同じ、61

[11] 船登芳雄（昭 56）『室生犀星論―出生の悲劇と文学』、三弥井書店、242

[12] 大橋毅彦（2000）『室生犀星への／からの地平』、若草書房、16

[13] 東郷克美（昭 53）「犀星の小説の方法」、『解釈と鑑賞・室生犀星特集』2 月号、102

[14] 川端康成「夕日炎炎――序に代へて」、室生朝子（昭 37）『晩年の父犀星』講談社、昭 37

[15, 5] に同じ

[16] 伊藤信吉（2002．10）「続室生犀星」、『すばる』参照

[17] 中野重治（昭 60）『室生犀星』、筑摩書房、59

[18] 村山古郷（昭 47）、『俳句もわが文学』、永田書房、169、173-174、175

《古事记》中的婚恋传说

Love Stories in *Kojiki*

刘 文星 (LIU Wenxing)
广州中山大学 中文系博士生
中山大学外国语学院高级讲师
SYSU, Guangzhou, Chinese Department, Candidate for Doctor's Degree
SYSU, Guangzhou, School of Foreign Languages, Senior Lecturer

Abstract

Kojiki is the earliest extant literary work in Japan. It integrates history, literature and ballad, and reflects various aspects of the imperial family and peripheral tribes in ancient Japan. Through classification and analysis of the love stories in *Kojiki*, this paper explores its text and concludes that, *Kojiki* not only exhibits qualities of first rate literature, but also lays the foundation of the system of laws and decrees for Japan. These love stories are neither contingently collected, not simply recorded by its compilers, but are classified together as a special "type". These stories consciously suppress the power of hereditary aristocrats and raise the status of the imperial family, which reflects the will of the Japanese ruling class. Moreover, this paper attempts to further prove the long standing influence of China on ancient Japanese culture.

[Key words] *Kojiki*, marital conventions, mythology, ancient Japanese history

《古事记》成书于公元 712 年，以记载日本上古时期的神话和历史传说为主，被认为是日本现存最早的一部记载口头传承的文学作品。全书以叙事为中心，融历史、文学、歌谣为一体,较全面地反映了天皇家族及其周边氏族的各个侧面。《古事记》分序和上、中、下三卷，由上代神话、民间传说、和歌歌谣、历史故事以及天皇系谱等组成。序和正文的叙事部分以汉文纂写，歌谣则借用汉字作为日语的标音来记录。根据序文的自述，《古事记》是正五位太朝臣安万侣奉元明天皇的命令，按天武天皇的遗愿，根据舍人稗田阿礼诵习的《帝纪》、《旧辞》等编写而成。《古事记》序记录了其成书经过，称此书乃"邦家之经纬、王化之鸿基"[1]。上卷是神话和传说，主要叙述了天地生成、诸神诞生、万物起源、国土形成、天孙降临、大国主让国以及天孙后代成为日本统治者的故事。中、下卷则神话、传说和史料兼而有之，从传说中的神武天皇开始，记载至推古天皇，共三十三代天皇的家谱和事迹。

战前日本有两位研究《古事记》的代表性学者，一位是江户时代的国学家本居宣长，另一位是大正昭和初期著名的东洋史学家津田左右吉。本居宣长认为《古事记》中所说的一切都是真实的，对书中所述的"历史"全部予以承认，推崇"大和心"，主张排除"汉意"和"佛意"[2]。后来这种思想被国

粹主义和军国主义所利用，成为日本发动对外侵略战争思想之滥觞。津田左右吉则对日本神话的历史虚伪性进行了批判，否定《古事记》中的一切，认为记纪中的神话传说类型并不属于反映儒教的政治思想类型，全都是后人根据中国思想强加上去的，并非日本民族本身的物语[3]。津田的学说在当时起到了解放思想的积极作用，但是对古典采取的虚无态度又把《古事记》再次化为"一本'谜'一般的神秘古书"[4]。由于他的研究对近代日本的国家政治体制构成了威胁，因此在日本法西斯统治最猖獗的 20 世纪 30 年代末，被认为是对天皇的大不敬，本人遭受起诉，著作亦被禁售。另一方面，1917 至 1921 年，津田发表《文学中表现出之我国国民思想的研究》八卷。书中，他就中国思想对日本思想形成之影响持消极态度，认为儒教无视人性，应当彻底否定中国思想，主张日本文化的独特性。可见，津田对日本民族文化的执着与对中国文化的批判是互为表里的，在其理性评判的背后，表现出了对中国思想的排斥[5]。

战后的日本以社会历史学派为藁矢，各个领域的学者对《古事记》展开了新的研究。1948 年，江上波夫在"日本民族·文化的源流与日本国家的形成"座谈会上提出"日本骑马民族说"，这一有关日本民族起源的假说对战后力图摆脱皇国史观的日本学界而言可谓轰动一时。围绕《古事记》以及日本民族、日本文化起源的讨论一直以来都倍受关注，各种学说层出不穷，研究数量之多称得上汗牛充栋。例如国际日本文化研究中心首任所长梅原猛提出的大胆假说认为，《古事记》编纂过程中"诵习"历史的稗田阿礼就是当时的实权人物藤原不比等，而"诵习"则是将原始史料按照对当权者有利的方式进行重新解读，并由此推断《古事记》是为当时的宗教改革和皇位继承作铺垫的。由于缺乏实证，梅原猛的独特学说受到了日本国文学界及历史学界的诸多质疑。

毋庸置疑，《古事记》是研究日本古代历史、思想、宗教、文学的珍贵资料。但是，正如王家骅曾指出的那样，"（日本学者）对《古事记》的研究大多依然强调它保存了日本民族固有的思想、文学和民俗等，对它所接受的'汉意'影响则语焉不详"[6]。而相对于日本学者数量庞大的研究，中国方面的研究往往侧重于比较神话学方面，对其思想性与文学性的研究虽然有一些，但还不是很多[7]。因此，本文围绕《古事记》中的婚恋传说，对这样一种表面上看似普通的文学叙事进行归类和分析，深入其思想内部，从中不仅可以窥见古代日本的社会习俗，更重要的是可以对它的成书性质、神话传说的本质、编撰者的意图以及与中国文化的联系等进行深入的探讨。

一、 氏族联姻与律令制国家的建设

《古事记》中有不少求婚的故事。一类是已知对方姓氏，直截了当表明心扉求婚的例子。例如：

其八十神、各有欲婚稻羽之八上比卖之心、共行稻羽时、于大穴牟迟神[8]负袋、为从者率往。

（《古事记》上卷·大国主神篇）

此八千矛神、将婚高志国之沼河比卖、幸行之时、到其沼河比卖之家……

（《古事记》上卷·大国主神篇）

又天皇、婚丸迩之佐都纪臣之女、袁杼比卖、幸行于春日之时、媛女逢道。

（《古事记》下卷·雄略记）

另一类是遇见美人，直接询问其姓氏进行求婚的例子。如：

于是天津日高子番能迩迩艺能命、于笠沙御前、遇丽美人。而问谁女、答白之、大山津见神之女、名神阿多都比卖。亦名谓木花之佐久夜毘卖。　　（《古事记》上卷·迩迩艺命篇）

故、到坐木幡村之时、丽美嬢子、遇其道衢。尔天皇问其嬢子曰、汝者谁子、答白、丸迩之比布礼能意富美之女、名宫主矢河枝比卖。天皇即诏其嬢子、吾明日还幸之时、入坐汝家。

（《古事记》中卷·应神记）

亦一时、天皇游行到于美和河之时、河边有洗衣童女。其容姿甚丽。天皇问其童女、汝者谁子、答白、己名谓引田部赤猪子。尔令诏者、汝不嫁夫。今将唤而、还坐于宫。

（《古事记》下卷·雄略记）

从以上例子可以看出，无论是已知对方姓氏的，还是偶然邂逅的，都毫不例外地明示了女方的家族出身，即：某族或某地方的某某的女儿。这表明：《古事记》中所记录的婚姻绝非简单的男女结合，而是十分明确地展现了天皇家与其他氏族联姻的过程，体现了日本古代国家形成和发展过程中部落的臣属与联盟关系。天皇和各氏族之间的这种姻亲关系，也正是天武时期八色赐姓的政治基础。《日本书纪》载：公元 673 年，在“壬申之乱”中取得胜利的大海人皇子于飞鸟净御原宫（今奈良县）即位，称天武天皇（673 年-686 年在位）。即位后，天武天皇积极推进大化革新未了的事业。经济方面，废除了天智天皇一度恢复的私有部民制，改革俸禄制，将赐予亲王以下的食封收归国有；政治上为加强皇权统治和军事力量，扫除旧势力，有步骤地进行氏姓制度改革和强化官僚律令体制。天武十一年（682 年）规定氏姓的序列作为选考官员的条件；天武十二年（683 年）授予倭直等 38 氏“连”姓；天武十三年（684 年），下诏更改诸氏族姓氏，制定“八色之姓”，即按地位等级分成八个等级，连一些外来移民也得到了相应的爵位。史料记载如下：

（天武十三年）冬十月己卯朔、诏曰、更改诸氏之族姓、作八色之姓、以混天下万姓。一曰、真人。二曰、朝臣。三曰、宿祢。四曰、忌寸。五曰、道师。六曰、臣。七曰、连。八曰、稻置。是日、守山公・路公・高桥公……十三氏、赐姓曰真人。

十一月戊申朔、大三轮君・大春日臣・阿倍臣・巨势臣……凡五十二氏、赐姓曰朝臣。

十二月戊寅朔己卯、大伴连・佐伯连・阿云连・忌部连・尾张连……五十氏、赐姓曰宿祢。

十四年春正月丁未朔戊申、百寮拜朝庭。丁卯、更改爵位之号。仍增加階级。……二月丁丑朔庚辰、大唐人・百济人・高丽人、并百卌七人赐爵位。　　（《日本书纪》卷第二十九）

氏姓制度原是皇族以外的贵族阶级所世袭，表明其地位的门第高低。八色赐姓一方面在原有之“臣、连、伴造、国造”等与天皇一族有很深渊源的氏姓基础上，新增“真人、朝臣、宿祢”等新的身份秩序，并以此明确上级官僚与下级官人之间的等级差异，从而提高天皇的权威，限制旧有贵族的势力。另一方面，天武赐姓同时亦明确了中央贵族与地方豪族的区分，加强了以天皇为中心的中央集权的控制，为律令制的推行和官僚制的实施奠定了政治基础。

可以说，八色赐姓的目的就是要废除世袭的氏姓贵族制度，加强天皇的统治权威，推行唐制式

的律令国家制度。无论是《古事记》还是《日本书纪》，每位天皇记（纪）里都要记载天皇娶了几位妻子，分别有多少位皇子皇女的做法与这种意图也是一脉相承的。

二、女性的命运与向父权社会的过渡

可以成为天皇妻子的女性个个都容颜俏丽。例如上述几例，分别被描述为“丽美人”、“丽美孃子”、“容姿甚丽”等。类似的还有：容姿丽美·美人（神武记·势夜陀多良比卖）、容姿端正（崇神记·活玉依毘卖）、美人（垂仁记·肥长比卖）、容姿丽美（景行记·兄比卖·弟比卖）、丽美孃子（应神记·矢河枝比卖）、颜容丽美·容姿端正（同上·发长比卖）、美丽娘子（同上·天日矛之妻）等等。由此可知《古事记》中形容女性的容颜身姿美丽多使用“容姿丽美（美丽）”、“端正”、“美人”等汉文表现形式，与同期的《风土记》和《日本书纪》的表达方式相同[9]，是当时普遍的审美标准。

然而，容颜丑陋的女性，则命运多舛了。例如：

（天孙迩迩艺命）乞遣其父大山津见神之时、大欢喜而、副其姊石长比卖、令持百取机代之物奉出。故尔其姊者、因甚凶丑、见畏而返送、唯留其弟木花之佐久夜毘卖以、一宿为婚。

（《古事记》上卷·迩迩艺命篇）

创世大神伊邪那岐和伊邪那美所生的三十五神之一的大山津见神面对天孙迩迩艺命的求婚，自然是满心欢喜，不但送上彩礼，而且将两个女儿都送了过去。可是，迩迩艺命却嫌姐姐相貌丑陋，竟然送还了。于是山神感到羞耻大怒，曰：

我之女二并立奉由者、使石长比卖者、天神御子之命、虽雪零风吹、恒如石而、常坚不动坐。亦使木花之佐久夜毘卖者、如木花之荣荣坐、宇气比互贡进。此令返石长比卖而、独留木花之佐久夜毘卖。故、天神御子之御寿者、木花之阿摩比能微坐。故、是以至于今、天皇命等之御命不长也。

（《古事记》上卷·迩迩艺命篇）

这段传说既是阐明事物的恒久与无常、生命长短起源的神话解说功能之表现，亦反映出《古事记》中记录了日本从较原始的走婚社会形态逐步进入到一夫多妻、男尊女卑的父权社会这一历史变化。

虽然权力至高无上，但天皇有时也得请“媒人”。如第一部分迩迩艺命篇的引文中，天孙“乞遣”，即“派遣使者”为媒的意思。又如：

天皇、以其弟速总别王为媒而、乞庶妹女鸟王。　（《古事记》下卷·仁德记）

然而大多数的情况是，高高在上的天皇既可随心所欲地诏婚心仪的女子，也可将她们随意处置。天皇同时诏婚一个或者多个女子的故事还有：

于是天皇、闻看定三野国造之祖、大根王之女、名兄比卖、弟比卖二孃子、其容姿丽美而、遣其御子大碓命以唤上。故、其所遣大碓命、勿召上而、即己自婚其二孃子、更求他女人、诈名其孃女而贡上。于是天皇、知其他女、恒令经长眼、亦勿婚而惚也。　（《古事记》中卷·景行记）

天皇闻看日向国诸县君之女、名发长比卖、其颜容丽美、将使而唤上之时、其太子大雀命、见其孃子泊于难波津而、感其姿容之端正、即誂告建内宿祢大臣、是自日向唤上之发长比卖者、请白天皇之大御所而、令赐于吾。尔建内宿祢大臣、请大命者、天皇即以发长比卖、赐于其御子。所赐状者、天皇闻看丰明之日、于发长比卖令握大御酒柏、赐其太子。　（《古事记》中卷·应神记）

景行记中，大碓命见色起心，将美人占为己有，终被父亲发觉，后被弟弟小碓命杀害；相比之下，应神天皇的皇子大雀命则幸运得多，征得父亲同意后抱得美人归。

如果有女子不听从天皇的诏婚，其下场便可想而知。例如，仁德天皇托其弟速总别王为媒，欲娶同父异母的妹妹女鸟王（见前述仁德记引文）。

尔女鸟王、语速总别王曰、因大后之强、不治赐八田若郎女。故、思不仕奉。吾为汝命之妻。即相婚。是以速总别王不复奏。（《古事记》下卷·仁德记）

女鸟王因畏惧皇后的嫉妒和强大，居然和派来求婚的天皇的弟弟速总别王结了婚，于是速总别王就没有向天皇复奏。因此天皇独自来到女鸟王的住处，看见她正在织衣，就问是织给谁的。女鸟王以歌答道：是织给“高高飞翔的雄鹰[10]”。这样，天皇明白了内中之情，回宫去了。此时，丈夫速总别王回来了，预感到危险的女鸟王唱道：

云雀在天空飞翔，高高飞翔哟，速总别快快扑杀哪鹪鹩！[11]

天皇听到了这首歌，就起兵去追杀他们。女鸟王和速总别王一同出逃，最终双双遇害。

在夫权、皇权的社会里，被天皇“返送”的女子，有的只好选择以死抗争。例如：

（天皇）又随其后之白、唤上美知能宇斯王之女等、比婆须比卖命、次弟比卖命、次歌凝比卖命、次圆野比卖命、并四柱。然留比婆须比卖命、弟比卖命二柱而、其弟王二柱者、因甚凶丑、返送本土。于是圆野比卖惭言、同兄弟之中、以姿丑被还之事、闻于隣里、是甚惭而、到山代国之相乐时、取悬树枝而欲死。故、号其地谓悬木、今云相乐。又到弟国之时、遂堕峻渊而死。故、号其地谓堕国、今云弟国也。（《古事记》中卷·垂仁记）

天皇一次诏婚四名女子，然而只留下两位，另两人因相貌丑陋而被送返。其中一人的圆野比卖因此觉得羞惭无比，屡次自寻短见。这个故事一方面是解释地名传说的由来，另一方面我们也可从中窥见当时女性悲惨的一面。

在古代，或是为了维系“万世一系”的血统，或是为了获得更多政治势力的支持，帝王拥有多位妻子似乎也理所当然。《古事记》上卷神代记中，出云地方的大国主神先后娶了六位妻子，招来了对他有过救命之恩的正妻、天神速须佐之男命的女儿须世理毘卖（亦为“须势理毘卖”）的嫉妒。例如，他历尽艰辛娶回的侧妻因幡国（稻羽八上郡）豪族的女儿、八上比卖由于受不了正妻的猜忌，不得不将刚生下的儿子夹在树杈上后，回娘家了。时隔不久，大国主神又娶了一位高志国（即越国，包括越前、越中和越后地方）豪族的女儿沼河比卖（见第一部分大国主神篇引文）。与其说大国主神移情别恋，倒不如说这也是一次重要的政治联姻，不料惹得正妻异常嫉愤。对此，大神深感苦恼，要从出云出走到大和国去。须世理毘卖为丈夫送行时，悲切地表白了心中的真情。她举杯唱道：

八千矛尊神，我的大国主哟！正因为你是个男子，可以走遍各个海岛，可以游遍各个海滨，可以把芳草般的爱妻找到。而我呢，因为是一介弱女，除你之外没有相好，除你之外没有丈夫哟！

不难想象，在这样一种制度下，正妻对其他妻子的嫉妒和怨恨是多么地强烈。无独有偶，仁德天皇也面临同样的苦恼。由于皇后石之日卖命的嫉妒，天皇所使唤的妃嫔等人，都不准许到天皇的寝殿中去。如果有什么异常的表现，皇后就会锤胸跺足，异常嫉妒。例如在黑日比卖一节中，天皇听说吉备国海直部的女儿黑日卖，姿容端正，便把她诏到宫中。但是黑日卖害怕皇后嫉妒，逃回本国去了。原文如下：

其大后石之日卖命、甚多嫉妒。故、天皇所使之妾者、不得临宫中、言立者、足母阿贺迦迩嫉妒。尔天皇、闻看吉备海部直之女、名黑日卖、其容姿端正、唤上而使也。然畏其大后之嫉、逃下本国。（《古事记》下卷·仁德记）

天皇只好坐在高台上，远望心上人的船出浮海并赋和歌寄以相思。后来由于实在是太过思念黑日卖，于是欺瞒皇后，来到黑日卖采菜的地里看望她。临别时，黑日卖献歌唱道：

大和刮起西风，云儿吹散远空，虽然两分离我也不忘情。

又唱道：

向大和走去的是谁的夫君？潜流的水暗暗流，暗暗流去的是谁的夫君？

“潜流的水”暗示天皇微行见访；“暗暗流去”比喻因害怕皇后的妒忌而匆匆离去。在众多的天皇爱情故事里，仁德天皇和黑日卖的爱情可以说是纯真的、浪漫的，然而却又是无奈的、不幸的。

当时的日本社会，无论贵族还是平民都流行访妻婚。访妻婚即走婚，在日语中称“妻问婚”，是日本古代的一种婚姻形式，盛行于大和时代，一直延续至平安时代。这种婚姻形态是夫妇别居，男子夜访女家留宿。夫妻关系相对松散，男性往往同时有多名妻子，女性也可能与其他男子保持交往，如《源氏物语》主角光源氏就经常夜访一些已婚女子并和她们发生关系。这种带有母系社会残余的婚姻形态在日本延续的时间很长，没有随着生产关系的改变而立即消亡[12]。一般情况下，如果男性不再造访，或被女方拒绝入内，婚姻关系就自动解除。双方所生子女一般由女方抚养，因而只知其母而不知其父。女性不仅在婚姻生活方面拥有和男性一样的自主性和选择权，而且也享有对家庭财产的支配权和继承权，地位较男子高。

但是，“神”的情况就有些不一样了。他可以诏来多位妻子，也可以走婚多个情人，而其妻则不被允许，上述情节就是最好的例证。这些传说从另一个侧面也证实了《古事记》编纂时尽管还在流行“妻问婚”，但至少“神”的婚姻就已经受到父权制和儒教男尊女卑礼制的影响。《古事记》编纂的时期正值日本从古代奴隶主贵族统治向律令制国家转变的过渡时期，其律令诸法均以唐律为范本，旨在把日本建设成以天皇为最高统治者的中央集权式官僚政治体制国家。唯独在婚姻制度方面，唐律规定的是一夫一妻制，娶妻后再娶妻即犯重婚罪；但允许纳妾，妾不是正式配偶，身份较卑贱，甚至可以买卖，也不能继承夫的遗产。而日本的统治者则根据日本的实际情况进行了变通，将前妻称为“妻”，后妻称为“妾”，承认“妾”享有与“妻”平等的地位，实行的是一夫多妻制[13]。在日本，直至昭和时代，一夫多妻制才被废除。

然而，即使在这样一种婚姻体制下，也有女性为了爱情而献身的例子。例如，景行天皇的小皇子，倭建命（即小唯命）的皇后弟橘比卖命为了丈夫东征的胜利而奋不顾身，令英雄的倭建命无比叹息。叙事如下：

自其入幸、渡走水海之时、其渡神兴浪、迂船不得进渡。尔其后、名弟橘比卖命白之、妾易御子而入海中。御子者、所遣之政遂应覆奏。将入海时、以菅畳八重、皮畳八重、锦畳八重、敷于波上而、下坐其上。于是其暴浪自伏、御船得进。（《古事记》中卷·景行记）

入水时，皇后唱道：

峻山耸立的相模田野，燃烧起熊熊烈火，夫君在火焰中怀念着我！

这段动人的传说其实是反映了古人祭祀海神的一种仪式。古人认为，在海上遇暴风雨，有沉船危险时，以珍贵物品或妇女投入海中就可平安。据传，“菅畳八重、皮畳八重、锦畳八重”都是海神

迎接宾客的礼节[14]。弟橘比卖命怀抱着对丈夫的念念不舍，以自己的性命换取了船只的平安。

三、爱情悲剧的实质乃皇位继承的血腥斗争

垂仁记中还记载了另外一种爱情悲剧。垂仁天皇娶了沙本毗古命的妹妹沙本毘卖为皇后。有一天沙本毗古命问妹妹：丈夫和哥哥更爱谁？当着哥哥的面，皇后只好说爱哥哥。于是，沙本毗古命就把经过特别加工过的短刀交给妹妹，让她伺机杀死天皇。但是，当皇后乘天皇睡着准备下手时，爱怜之情油然而生，不忍下手，而且落泪惊醒了天皇。垂仁天皇知情后发兵攻打沙本毗古命，皇后抑制不住思念哥哥的感情，逃到了哥哥那边。天皇不胜怀念皇后的怀孕之身以及恩爱之情，努力想挽回皇后。于是，

如此逗留之间、其所妊之御子既产。故、出其御子、置稻城外、令白天皇、若此御子矣、天皇之御子所思看者、可治赐。于是天皇诏、虽怨其兄、犹不得忍爱其后。故即有得后之心。

（《古事记》中卷·垂仁记）

然而，皇后心意已决，不肯回到天皇身边。最后沙本毗古命被杀，皇后也跟着死了。这个故事表面上是因为争夺女人而产生的叛乱，但从沙本毗古命对皇后所说“汝寔思爱我者，将吾与汝治天下”的话中，我们不难推断叛乱的实质是围绕皇位继承而展开的血腥斗争。

同样的悲剧还在允恭记中出现。被指定为皇位继承人的木梨之轻太子，因为和胞妹衣通王通奸而遭到穴穗皇子迫害。

是以百官及天下人等、背轻太子而、归穴穗御子。尔轻太子畏而、逃入大前小前宿祢大臣之家而、备作兵器。穴穗御子亦作兵器。（中略）故、大前小前宿祢、捕其轻太子、率参出以贡进。

（《古事记》下卷·允恭记）

轻太子被捉时，仍惦念着心爱的妹妹，唱道：

天空中飞着的轻姑娘，恸哭人们将知晓；那波佐的山鸠，暗地里低低泣着。

衣通王追随来到太子被流放的地方，两人以和歌对唱之后，一块儿自杀了。当时的日本社会禁止同母兄弟姊妹之间的结婚，但是同父异母的兄弟姊妹结婚则很普遍，如敏达天皇和推古天皇、用明天皇和间人皇后等都是同父异母的兄妹婚。因此，木梨之轻太子和胞妹衣通王的爱情一般被认为是不伦之恋。然而，笔者以为：这场悲剧更深层的实质乃是围绕皇位继承的骨肉相残。因为古时的日本，皇位实行的是横向承继，即先兄弟后儿子。由于木梨之轻太子的特殊身份，“天皇崩之后、定木梨之轻太子所知日继、未即位”，也就是说只要把还没继位的轻太子除掉，其他的皇子便可取而代之。同样地，前引女鸟王和速总别王的悲剧也可以从这个角度去解读。

总之，上述例子中的沙本毗古命和木梨之轻太子以及速总别王都是皇位继承斗争中的失败者。《古事记》的编纂者通过有意识地描写，巧妙地将皇室内部血腥的斗争变成了情节生动、令人感慨的爱情悲剧，使之既具有史料价值，又增强了作品的文学性和可读性。

四、奇特的婚恋传说凸显神统的至高无上

此外，《古事记》中还有不少奇特的婚恋故事。例如，天孙的一夜婚就是一则不可思议的神话传

说。天孙迩迩艺命娶了一见钟情的木花之佐久夜毘卖后一宿为婚（见第一部分迩迩艺命篇引文）。不久，木花之佐久夜毘卖怀孕了，便告知天孙：

故、后木花之佐久夜毘卖、参出白、妾妊身、今临产时。是天神之御子、私不可产。故、请。尔诏、佐久夜毘卖、一宿哉妊。是非我子。必国神之子。　　（《古事记》上卷·迩迩艺命篇）

不料迩迩艺命却怀疑那不是自己的孩子，于是木花之佐久夜毘卖答道：

尔答白、吾妊之子、若国神之子者、产不幸。若天神之御子者幸。即作无戸八寻殿、入其殿内、以土塗塞而、方产时、以火著其殿而产也。故、其火盛烧时、所生之子名、火照命（原注：此者隼人阿多君之祖[15]）。次生子名、火须势理命。次生子御名、火远理命。亦名、天津日高子穗穗手见命。

（《古事记》上卷·迩迩艺命篇）

因为当时盛行走婚，天孙的怀疑也不无道理。离奇的传说背后一方面是为了凸现“神”的力量，不仅可以使对方一夜怀孕，而且正因为是天神，所以他的孩子在烈火中诞生依然毫发无损；另一方面，这段婚恋也为中卷神武天皇的登场做好铺垫：天孙和木花之佐久夜毘卖的第三个儿子天津日高子穗穗手见命（火远理命）后来娶了海神的女儿丰玉毗卖命，生了天津日高子波限建鹈葺草葺不合命，波限建鹈葺草葺不合命又娶了姨母玉依毗卖命，所生的第四个儿子就是日本的第一代天皇神倭伊波礼毗古命（谥号：神武天皇）。如此一来，天皇家就名正言顺地成为天孙的后代，从天神变成人皇，代表天神来统治日本了。这段传说明显带有与当时的日本风俗不尽一致的性道德观念，强烈表现了“神权天授”的统治权继承与血缘正统性的紧密相连。

综上所述，《古事记》虽“上古之时，言意并朴，敷文构句，于字即难”，但经过太安万侣煞费苦心地“仔细採摭”，使得整体叙事不仅具有一流的文学作品所具备的情节魅力，而且为建立中央集权制的律令制国家奠定了思想基础，不愧被誉为是日本文学史的第一部作品。但是，这些婚恋传说——既有如歌如泣的爱情故事，也有天孙族和土著氏族结合的政治联姻，还有人神婚、异类婚等的原初神话传说——都并非是偶然的集合，也不是编纂者单纯的笔录，可以认为是以某种特定的“类型”，将这些神话和传说在笔录的过程中有意识地统一起来，很大程度上抑制了世袭贵族的势力，提高了皇室的地位，反映着统治阶级的意志。同时，通过拙论上述的考察也进一步证实了《古事记》受到“汉意”即大陆思想的影响，反映出中国文化对日本文化影响之源远流长。

注释

[1] 倉野憲司校注(1973)『古事記』序、212

[2] 石川淳(1986)「宣長略解」、『日本の名著　本居宣長』、9

[3] 津田左右吉(1963)『津田左右吉全集(第一卷)日本古典の研究(上)』岩波書店、332-334

[4] 梅原猛(卞立强、赵琼译，1999)《诸神流窜——论日本<古事记>》，经济日报出版社，第 15 页　译者前言

[5] 有关津田左右吉的评述，参见刘萍（2004）《津田左右吉研究》，中华书局

[6] 王家骅(1986)“试论儒家思想对日本《古事记》的影响”《南开学报》1986 年第 2 期

[7] 劉文星(2013)「中国における『古事記』の研究」、『大東文化大学日本語学科 20 周年記念論文集』、121－130

[8] 大国主神，又名大穴牟迟神、苇原色许男神、八千矛神、宇都志国玉神，共 5 个名字，是天照大神的弟弟速须佐之男命的六世孙，后让国给天孙迩迩艺命。

[9] 戸谷高明（1985）「古事記における発想と表現の類型」、日本文学研究資料刊行会編『日本文学研究資料叢書　古事記·日本書紀』、30

[10] 日语中速总别的发音与雄鹰“隼”相同，此处是双关语，以速总别比雄鹰。

[11] “鹪鹩”指大雀命，即仁德天皇。《古事记》中的歌谣是借用汉字作日语的语音标记来记录的，故本文中《古事记》的歌谣均引自邹有恒、吕元明译(1979)《古事记》的翻译。

[12] 李卓(1994)“日本古代的访妻婚及其存在的原因”《日本学刊》1994 年第 2 期

[13] 王家骅(1991)“儒家思想对日本古代律令的影响”《日本研究》1991 年第 1 期

[14] 邹有恒、吕元明译(1979)《古事记》，第 106 页注①

[15] 上古九州南部的居民。此处是其氏祖起源之传说。

参考文献

邹有恒、吕元明译(1979)《古事记》，人民文学出版社

石川淳(1986)『日本の名著　本居宣長』、中央公論社

梅原猛(卞立强、赵琼译，1999)《诸神流窜——论日本<古事记>》，经济日报出版社

倉野憲司校注(1973)『古事記』、岩波書店

坂本太郎、家永三郎、井上光貞、大野晋校注（1994）『日本書紀』、岩波書店

津田左右吉(1977-1978)『文学に現はれたる我が国民思想の研究』、岩波書店

日本文学研究資料刊行会編(1984-1985)『日本文学研究資料叢書　古事記·日本書紀』、有精堂

学習者が捉えた「いい」文章のポイント
―初中級学習者による説明文課題のピア・レビュー―

What Makes "Good Writing"? :
An Observation of Peer Reviews by Pre-Intermediate Level Learners of Japanese on their Expository Writings

水戸 淳子 (MITO Atsuko)
香港大学 日本研究学科
The University of Hong Kong, Department of Japanese Studies, Language Instructor

Abstract

This paper reports peer reviews by pre-intermediate level learners of Japanese on their expository writings. In this activity, the students were asked to choose the best writing from their peer groups and specify its good points. They considered paragraph structure, uses of conjunctions and readers' perspective as the keys to determine "good" writing.

1. はじめに

学習者の作文能力の向上に向けて、これまで作文教育の分野では教師の添削や学習者とのカンファレンスといった、教師が個々の学習者に対してフィードバックを行うやり方や、「作文の推敲のために学習者同士がお互いの書いたものを書き手と読み手の立場を交替しながら検討する」(池田 2007、p.71)ピア・レスポンスといった活動が報告・研究されてきている。ピア・レスポンスのような学習者同士で読み合う活動は、学習者の、文章を客観的に見る力を深め、自分の書いたものに対しても分析的になれるという長所がある（国際交流基金　2010）。それだけでなく、影山(2000)が指摘するように、ピア・レスポンスでは言葉の正確性といった表面的な推敲ではなく、文章の構成面での推敲に特に効果的であると言われている。また、文章産出研究の知見からは、深谷(2009)の研究において、「評価の経験」「適切な（根拠のある）自己評価と他者評価」が熟達した書き手になるための必要な要件として取り上げられている。

筆者はこれまで日本語学習者が書いた作文を多数見ていく中で、特に初中級以降においてまとまりのある文章を産出できるようになっていくためには、文章を客観的・分析的に捉える能力が非常に大きな役割を果たしているのではないかと感じていた。

そのため、今回、ある初中級のクラスにおいて説明文の作成を課題とした際に、学習者同士でグループを作って互いに書いたものを読み合い、各々がその中から一番いいと思うものを選び出し、その「よさ」について分析し、記述化してみるという形でのピア・レビュー活動を行ってもらった。この結果から、学習者が日本語の正確さという要素以外の部分（文章の構成／内容／表現面）において、「いい」文章というものをどのように捉えているのかについて探り、分析を試みた。

2. ピア・レビュー活動

2.1 コース／授業の枠組み／学習者

この取り組みを行ったのは、香港の大学で日本研究を専攻・副専攻する初中級レベルの学習者を対象としたコースの授業においてである。学生数は 33 名で、主な学習者は大学在学中に日本への留学をしない形で最終学年[1]を迎えた学生である。このコースは、「読む」「書く」「話す（独話、会話）」のモジュールで構成されており、それぞれ毎週 1 回（100 分）の時間が当てられている。今回、ピア・レビューを試みたのは、この「書く」モジュールの授業においてである。なお、この学期では授業は各モジュール約 12 回で構成されていた。

このコースで各モジュールを横断する全体目標として掲げられているのは「自立した日本語学習者になる」ことであり、これは大学卒業後においても学習者が自分で日本語の力を伸ばしていくことができるようになることをも視野に入れたねらいである。

「書く」モジュールにおける行動目標は前期が「具体的な事柄について、800 字程度の説明文、報告文が論理的に書ける」、後期が「やや抽象性が高い事柄について、800 字程度の意見文が論理的に書ける」であり、今回のピア・レビューの試みは前期の前半部分のまとめとしての課題の作文について行った。

また、受講している学習者は最低限として旧日本語能力試験３級レベルの文法的知識を持っていることが求められていたが、実際に有している文法的知識には大きな個人差がみられた。

2.2 課題に取り組む前の授業内容

コースの最初の約 3 回の授業を通して、日本語作文の基礎として「話し言葉との違い」「表記法」「文体」といった単元を取り上げたが、その際には一方的な講義形式の授業は行わず、自己発見型／グループ内での話し合いを行う形式の授業を行った。このような活動を取り入れた背景には、この後に行うピア・レビューの下地作りとして学習者にこういった形式に慣れてもらうという意味合いもあった。

2.3 課題内容

ピア・レビュー活動を行う対象とした説明文課題は以下のものにした。

説明文課題

本大学に留学している日本人留学生のために、大学内のいろいろな施設やサービスの利用方法をまとめた小冊子を作ることになりました。あなたは、『〇〇〇学生食堂［大学内の実際の食堂名］の利用方法』について紹介するページの担当になりました。この食堂を全く利用したことがない日本人の留学生が 1 人で利用できるように、Ａ４一枚で分かりやすく利用方法を紹介してください。

このような課題を設定した背景には以下の理由があった。

① 注文する物によって手順が異なったり、複合的な手順が必要であったりすることなどから複雑な説明が要るため、様々な表現を駆使する必要がある。

② 学習者全員が熟知している自明の内容ではあるが、文章の目的や対象となる読み手のことを考え、指定の紙幅内でまとめるためには、書く内容の取捨選択・編集、構成上の工夫が大きく必要とされる。

③ 学習者にとって、リアリティのある設定のため、興味を持って取り組める。

2.4 課題作成に向けての準備活動

課題作成に向けての準備として約 2 回の授業を使って物事の順序や手順／手続き／仕組み／方法を説明するための表現を中心に練習を行った。具体的には『にほんご作文の方法』の「2 物事の前後関係」、「3　物事の仕組み・手順・方法(1)」、「3 物事の仕組み・手順・方法(2)」、そして、『大学・大学院　留学生の日本語 2　作文編』の「第 12 課　手順を述べる」を使用し、「～てから」「～前に」「～後で」「～とき」「～たら」「～場合」「～なら」「～と」といった時系列／順序／条件／場合分け表現や、「まず」「次に」「それから」「さらに」「最後に」といった接続詞の使い方を復習し、「空港までの行き方」、「図書館の利用方法」、「病院での診察の受け方」といったトピックで、まとまりのある手順文や説明文を書く練習を行った。そして、これらの練習の総まとめとして、上記の説明文課題に取り組んでもらった。

2.5 課題作成／ピア・レビューの実施

課題作文の作成は宿題とし、十分な時間が取れるようにした。そして、提出後の授業においてピア・レビューを行った。具体的にはクラスを４、５名のグループに分け、グループごとにお互いの書いた作文を読み合い、その中で自分が一番「いい」と思う作文（自分の作文以外）を選び、レビュー・シートにそれを書き入れ、その「よさ」の具体的な点とその該当箇所を作文内から具体的に挙げて記述してもらった。その後、グループごとにその結果について話し合い、それらを共有し、考えをより深めてもらった。レビュー・シートは授業後に提出してもらった。当日、4 名の欠席者がいたため、ピア・レビュー参加者は 29 名であった。

今回、学生には文章の「よさ」を判断するにあたっては「日本語の正確さ」という観点は外し、作文の「構成」「内容」「表現」面に注目して行うように伝えた。

また、レビュー・シートへの記述とグループ内での話し合いは、日本語で行うのが困難な場合も想定されたため、中国語や英語でもいいこととした。

2.6 ピア・レビュー結果

ピア・レビューの最中に筆者が各グループを回ったところ、グループの話し合いでは日本語が主に使用されていたが、学習者の母語である広東語も一部使われていた。提出されたレビュー・シートには単語が中国語や英語で記載されているものはかなりあったが、文はほぼ日本語で記述されていた。

各グループ内で「いい」作文として選び出されたものは若干バラつきがあったものの、ほぼ特定の１つか２つに絞られていた[2]。グループ内の一致度が高かったものの１つとして以下の作文を挙げる。

資料１：「いい」とレビューされた作文

〇〇〇学生食堂の利用方法

〇〇〇学生食堂では「グラブ・ アンド・ ゴ」(1.GRAB n GO)、ファーストフードカウンター（2.本地快餐)、中華料理カウンター（3.中式美食)、広東ロースト料理カウンター（4.焼味)、国際料理カウンター（5.國際美食)、洋食レストラン（6.餐廳）に分かれています。利用方法は下記の通りです。

まず、キャッシャーの前のメニューで食べたいものを選んでください。パンやサンドイッチを買いたいときは、キャッシャーの隣の「グラブ・ アンド・ ゴ」コーナーの冷蔵庫に買いたい物を取ってキャッシャーでお金を払ってください。カウンター２～５のメニューにある食品が食べたいときには、キャッシャーあるいはキャッシャーの側に二つある食券自動販売機で注文してください。

キャッシャーでは、カウンター２～５のメニューにある食べ物が全部注文できますが、食券自動販売機では、カウンター３、４のメニューの食品（中式美食、焼味）しか注文できません。しかも、キャッシャーでは現金もオクトパスカードによる支払いもできますが、食券販売機ではオクトパスカードだけ使われます。

お支払いをしたら、食券がもらえます。それから、それぞれのカウンターでトレーと食具を持ち、スタッフに食券を示します。飲み物はカウンター２しか取れられないから、二つのカウンターへ行かなければならない場合は多いです。

カウンター６の食品を買いたいとき、つまり洋食を食べたいときは、カウンター６へ行き、カウンターの前でご注文ください。スタフに番号が書いているプラスチックカードをもらってから奥の「餐廳専用部屋」で座って待ってください。食品は５～１０分ぐらいあと店員から届けてもらえます。

ファーストフードカウンター（2.本地快餐）と中華カウンター（3.中式美食）の間に給水器があるのでご利用ください。最後に,席に着き食事が終わったら,ラックにトレーを返却してください。

食堂の利用時間は朝 7 時 30 分から午後 9 時 30 分までです。

この作文例に対して、その「よさ」としてピアから挙げられていた点を以下にまとめる。

資料２：資料１の作文の「よさ」のポイント

構成面

・　話題ごと（ex. 食べられる食事の種類 / 支払い方法）、順序ごと、状況ごと（ex. 洋食を食べたいとき）に段落分けがされている

表現面

・　適切な接続詞（まず / それから / 最後に）
・　文章をまとめる表現（「利用方法は下記の通りです」）
・　分かりやすい文型や言葉

内容面

・　情報が詳しくて親切（ex. 食べられる食事の種類とそのカウンター / 支払い方法 / 給水器 / 利用時間について）

また、他のグループで「いい」と選び出された作文に対して挙げられた「よさ」のポイントも以下にまとめる。

資料３：その他の「いい」とされた作文例の「よさ」のポイント
（資料２以外のもの）

構成面

・　段落内の構成がその話題についての「重要性の高い情報　⇒　細かい情報」になっているのがいい
・　最初に日本の留学生に向けたイントロがあるのがいい
・　最後に日本の留学生に向けたクロージングがあるのがいい
・　段落の長さがちょうどいい
・　サブタイトルの使用が効果的
・　箇条書きでステップが追いやすい

表現面

・　文が長すぎなくて分かりやすい
・　段落最初の中心文だけ字が大きいので、基本情報を追いやすい

内容面

・　情報が詳しくて親切（ex. 混む時間帯 / 持ち帰りの方法 / ご飯の量を少なくしたい場合）
・　日本人留学生を意識した説明（食堂で提供されるローカル料理について / メニューは英語でも書いてあるので安心）

ピア・レビューに参加した 29 名の学習者達が記述した「よさ」の項目
の全体数は 145 であり、似たような内容のものをまとめて、１つの項目としてその種類をまとめると、資料２と資料３のようになり、合わせて 14 種類にまとめることができた[3]。

学習者が挙げた 145 の項目のうち、文章の構成面に関するものは 42、内容面に関するものは 53、そして表現面に関するものは 50 であり、ほぼ同程度の割合で記述されていた。

2.7 ピア・レビュー活動後のフィードバック

これらの各学習者から挙げられたポイントについては教師の方でまとめ、翌週の授業でクラス全体にフィードバックし、クラス内での共有化を行った。また、この時にピア・レビューではレビューの対象外であった「文法や語彙の正確さ」についても教師が全体的なフィードバックを行い、また個々の作文に対しても個別にフィードバックを行った。

2.8 ピア・レビュー結果の分析

今回の課題の感想として学習者から多く聞かれたのは「よく分かっている内容なので簡単そうだと思ったが、やってみたら意外と難しかった」というものであった。

どの学習者の作文を見ても、利用方法の基本的な時系列上の流れ（メニューから食べたいものを選ぶ　⇒　食券を購入する　⇒　指定のカウンターに並んで、トレイと食器を自分で用意し、食券を渡し、料理を受け取る　⇒　食事後、トレイを片付ける）は押さえられているのであるが、様々な選択肢や場合が存在するため、それらによって異なる手順や必要な情報というものをどうまとめ、組み立て、書き分けるかという点が難しかったようである。

したがって、構成面での「よさ」として学習者の多くが記述したのが、それらの書き分けをめぐって段落内や段落の組み立てがいかに工夫されているのかに関するものであった。また、表現面においても、学習者が記述したものの中の多くが、書き分けをめぐって接続詞をどのように効果的に用いて文章のまとまり／関連付けを表すかに関するものであった。

一方、内容面においての「よさ」のポイントとして学習者の多くが取り上げていたのが、読み手に配慮した情報や説明があるという点であった。今回の説明文の課題においては、「この食堂を全く利用したことがない日本人の留学生が１人で利用できるように」という文章の目的が示され、また読み手となる対象は「本大学に留学している日本人留学生」とはっきり絞られていたため、読み比べる際にも、この「読み手」となる対象の視点を意識して「よさ」を判定していたことがうかがえた。

3. まとめと考察

今回ピア・レビューを行った課題の説明文は自分しか知らない内容について他の人に伝えるタイプの説明文ではなく、学生食堂の利用方法という学習者全員にとって自明の内容についていかに書き表すかというタイプのものであった。このため、読み比べをする際には内容の理解に時間を取られることなく、自明の内容をどう目的に沿って分かりやすく書き表すかに焦点があてられ

たと思われる。その結果、文章の「よさ」して多くが挙げたのは、2.8 でも述べたように「段落構成上の工夫」や「接続詞の適切な使用」、「読み手の視点」といった点であった。これは逆を言えばこういった点に焦点を当てて作文指導をしたい時は、このようなタイプの文章を課題とすると効果的であると言えるだろう。

文章の「よさ」を具体的に構成するものはその種類や目的、読み手、媒体、ジャンルが変われば異なってくることが予想される。したがって、文章の書き手は「よさ」の構成要素をその都度自ら具体的に考えることが何より重要であると言えるだろう。そのためには、自分が書こうとしている文章についてまず自分で俯瞰して考えてみる姿勢や、考える際の視点、判断力を持ち合わせていることが求められる。

大学卒業後も「自立した学習者」として学び続け、日本語で書く力を向上させていくためには、このような、学習者同士で書いたものを読み合い、比較検討し、「よさ」を言語化してみるという実際的な活動を通して、「いい文章」についての客観的・分析的な視点を涵養していくということが大きな意味を持ちうるのかもしれない。

今後は感想文／報告文／意見文といった違う種類の作文についてもこういった活動を実施し、結果を合わせて考察していきたいと考えている。

脚注

1　この取り組みを行った当時の学制制度では大学は３年制であったため、３年次を指す。

2　ピア・レビュー活動においては「グループ内での選出結果は最終的な成績には影響せず、個人がどれだけしっかりレビューを行ったか」だけを教師はチェックすると学習者に伝えていたが、クラスメートに気を遣って自分以外の全員のものを「いい」としていた学生もいた。

3　内容面の「情報が詳しくて親切」という項目は、取り上げられていた具体的な内容が違ったため、資料 2 だけではなく、資料 3 でも項目として再度記載した。

参考文献

アカデミック・ジャパニーズ研究会(2001)『大学・大学院　留学生の日本語②作文編』、アルク

池田玲子(2007)「ピア・レスポンス」、池田玲子・舘岡洋子『ピア・ラーニング入門』、ひつじ書房

影山陽子(2000)「上級学習者による推敲活動の実態―ピア・レスポンスと教師フィードバック」、『お茶の水女子大学人文科学紀要』54 巻、107-119

国際交流基金(2010)『国際交流基金　日本語教授法シリーズ 8　書くことを教える』、ひつじ書房

佐藤政光・田中幸子・戸村佳代・池上摩希子(2008)『表現テーマ別　にほんご作文の方法(改訂版)』、第三書房

深谷優子(2009)「読解および作文スキルを向上させるピアレビューを用いた共同推敲」、『東北大学大学院教育学研究科研究年報』57 巻 2 号、121-132

與那覇潤 著『中国化する日本　日中「文明の衝突」一千年史』

（文藝春秋社　2011 年 11 月 19 日発刊　1575 円）

青山 玲二郎 (AOYAMA Reijiro)
北京大学外国語学院 2009 年級博士課程研究生

「中国化する日本」というタイトルに驚かされるが、中国が覇権を握り日本を支配するという内容ではない。中国の宋朝を近代の始まりと捉えることによって西洋中心の近代的歴史観に挑戦する意欲作だ。

著者は中国の宋朝がグローバル化と自由競争の始まりだと捉える。その特徴は二つ「科挙」と「郡県制」だ。科挙という官僚採用試験が導入され、理論的にはどのような出身でも試験にさえ受かれば身分社会の最上位にまで辿り付けるようになった。また郡県制によって人と土地が切り離され、売買次第で財産を築くこともできれば一文無しになることもありえる。著者はこのような良く言えば徹底的な自由競争社会、悪く言えば圧倒的な格差社会を「中国化」という概念で表現している。

一方著者は「中国化」に対立する概念として「江戸時代化」を提示している。江戸時代のキーワードは「士農工商」と「封建制」だ。士農工商によって優秀な人も無能な人も身分が固定され、封建制によって人は土地に縛り付けられた。更に鎖国で外国との交易を禁止するという究極の規制をひき自由競争を阻んだ。良く言えば安定社会、悪く言えば停滞社会を「江戸時代化」と表現している。つまり競争がどの範囲で行われるかにおいて「中国化」と「江戸時代化」は対極にある。「中国化」は誰にでも可能性があり機会の平等は保障されているが、範囲を区切らず競争するため結果として一部の強いものが富み続け大半の人は貧しくなり続ける。「江戸時代化」は身分が固定されているためどんなに優秀でも這い上がれないが、同じ身分の仲間同士は助け合うのでどこまでも落ちていくという事は少ない。

著者は日本の源平合戦から１千年に渡る歴史をこの「中国化」という概念で分析しており、一般に日本が「西洋化」したと捉えられている明治時代以降にもこの概念を当て嵌めている。明治維新は産業革命による競争社会で「中国化」したが、昭和維新から農本主義になり農村を救えとブロック経済で雇用を守り国家統制に戻り「江戸時代化」した。戦後は高度成長し人が都市に移動して「中国化」したが、国土の均衡ある発展やふるさと創生事業と競争なき社会を目指し「江戸時代化」した。小泉改革は規制緩和を唄う「中国化」だが、首相が変わったら昭和ブームが起きて「江戸時代化」が始まる。

一般に近代の歴史を見るとき、西欧が産業革命で先に富み、アメリカが追いつき、日本はその後にやってきたと考える西洋中心史観は広く受け入れられている。この進化論的な図式で行くとブラジル、ロシア、インド、中国という各国はやっと先進各国に追いついてきた新興国と見なされる。日本の明治維新以降の歴史について考える時もこの図式に従って「なぜ日本はヨーロッパ

文化圏以外で初めて近代化できたか」という疑問を解き明かすのが日本的言説の定番であった。答えは二つ用意されていて、一つは「日本は西洋化したから近代化できた」であり、もう一つは「日本は特殊だから」というものだ。前者は西欧文化中心主義的な言説であり、後者は「日本人論」「日本文化論」として多くの読者を獲得してきた。新渡戸稲造の『武士道』(1900)、岡倉天心の『茶の本』(1904) から始まり、戦後の『菊と刀』(Benedict 1946) や『弓と禅』(Herrigel 1951)、そして『タテ社会の人間関係』(中根 1967)、『「甘え」の構造』(土居 1973)、『ジャパンアズナンバーワン』(Vogel 1979) など多くのベストセラーが「なぜ日本は特殊か」という問いに答え、「欧米」と「日本」という二項対立を本質化させ続けてきた。しかし著者の「中国化する日本」は「なぜ日本は特殊なのか」という問い自体を疑い、更に「なぜ日本はヨーロッパ文化圏以外で初めて近代化できたか」という問いが発生する構造を無効にする。近代化は西洋から始まったのではなく中国の宋朝で既に始まっていた。日本の歴史はグローバルスタンダードである「中国化」に従うか、抗うかの選択の間でこの千年間動いてきた。昨今の TPP の論争も「中国化」か「江戸時代化」の文脈で分析することができると著者は述べている。

私は海外に移住する日本人を研究対象としているので、現代日本人の国際移動について著者の概念である「中国化」「江戸時代化」を使って考えてみたい。明治維新以降、日本人は第二次世界大戦まで海外に移住し続けてきた。移住地域も南米、北米、東アジア、太平洋地域と世界中に広がっていった。明治維新から第二次大戦まで日本人は機会を求めて移動しつづけ「中国化」して行ったと言える。しかし第二次世界大戦敗戦によりアジア地域の日本人の多くが帰還した。戦後は南米地域などへの移民が継続したとはいえ歴史的に見ると国際移動の少ない「江戸時代化」が進んでいたと言える。外務省の調査によると 2011 年の時点で海外に在住している日本人は 118 万 2557 人である。日本の総人口である 1 億 2800 万人のわずか 1%弱に過ぎず、外国に住んでいる国民の多い西欧諸国に比べると移動の自由が少ない「江戸時代化」に近い状況だ。しかし海外に在住する日本人数は近年は増加傾向にあり、今後「中国化」して行くと予想される。特にアジア地域における日本人は 1996 年の時点では 15 万 3386 人であったが 15 年後の 2011 年には 33 万 1796 人と 2 倍以上に増加している。特に中国では 1996 年の時点で 5 万 7523 人であった日本人が 2011 年には 16 万 3327 人と 3 倍近くになっている。ヒト、モノ、カネが自由に移動する点において日本は「中国化しつつある」と言える。このような「中国化」が齎す帰結としての過剰な競争や貧富の格差に対応して、人々が範囲を区切って助け合う「江戸時代化」が進展するのも必然であろう。「中国化」と「江戸時代化」の鬩ぎあいの中で国籍、人種、性別、階級の区別が再強化されるのか、または新たな区別が生まれるのか注視していきたい。

「アジア日本研究」第 2 号

日本語・中国語論文執筆基準

1. 題名：
日本語論文の場合は日本語および英語、中国語論文の場合は中国語および英語の両言語による題名を記す。

2. 執筆者の氏名：
- 漢字圏の執筆者の場合は、漢字およびアルファベット、または漢字およびカタカナで表記。
- 漢字圏以外の執筆者の場合は、アルファベットおよびカタカナまたはアルファベットだけで表記。

3. 執筆者の所属機関・役職名：
日本語（漢字、カタカナ、ひらがな）および英語、または中国語および英語で記述。
（例）香港大学日本研究学科准教授
The University of Hong Kong, Department of Japanese Studies, Associate Professor

4. 要旨：
日本語論文の場合は300語の英語要旨を、中国語論文の場合は800字の日本語要旨をつける。

5. 用字・用語の統一
- ローマ字の表記はヘボン式とする。
- 重要語などを示す場合、ゴチック体とするか、アンダーラインを引く。英語綴りの場合は、イタリック体とする。

6. 章節
章節記号は以下の例に従う。
章　1，2，3，
節　1.1，1.2，1.3
小節　1.1.1，1.1.2，1.1.3

または

第一章
第一節
一
（一）

7. 脚注
- 脚注は文末脚注を用いる。
- 文末脚注番号は、本文の該当個所に肩付き数字で、句読点の前に [1] [2] [3] といれる。

8. 図表、写真
- 図表は原則として電子ファイルを電子メールに添付して提出する。
- 図表、写真には、それぞれの通し番号を付し、表題をつける。
- 本文中に挿入する場合は、本文中に適当なスペースをとり、図表、写真の番号を付す。
- 図表、写真を、他の出版物から転載する場合は、事前に当該図書の出版社から転載許可を受け、その図表、写真の下に、当該図書の著者／出版年／書名／出版社名を記入する。

9. 参考文献の記述方式

- 原則として参考文献目録をつける
- 参考文献目録は記述されている言語によって分類し、日本語論文の場合は、まず日本語の参考文献を著者名あるいは編者名の 50 音順によって並べる。次に日本語以外の文献を列記する。並べる順番は、英語の文献の場合はアルファベット順、中国語、韓国語の文献の場合は執筆者の判断にしたがって順番を定める。中国語論文の場合は、まず中国語の参考文献を執筆者の判断にしたがって並べ、次に中国語以外の文献を列記する。並べる順番は、日本語の場合は著者名あるいは編者名の 50 音順、英語の場合はアルファベット順、韓国語の文献の場合は執筆者の判断にしたがって順番を定める。
- 日本語文献の場合は、原則として次の記載方式による。

  1) 著者名 2)(刊行・発表年) 3)「論文名」 4)『著書名または雑誌名』 5)発行機関 6)頁

  (例)

  朴裕河(2006)『和解のために』、平凡社

  田嶋陽子(1992)「駒子の視点から読む『雪国』」、江種満子・漆田和代編集『女が読む日本近代文学ーフェミニズム批評の試みー』、新曜社

  李美靜(2006)「在日台湾人子どもの読解力の測定—中国語母語話者と日本語母語話者の読解力を比較分析する—」、『日本語教育論集 世界の日本語教育』第 16 号、国際交流基金、19－33
- 英語文献の場合は、原則として次の記載方式による。

  1) 著者名 2)(刊行・発表年) 3)"論文名" 4)*著書名または雑誌名* 5)発行地及び発行機関(雑誌の場合は不要) 6)頁。 なお、4)については、イタリック体で書く。

  (例)

  Lie, John (2001) *Multiethnic Japan* (Cambridge, Massachusetts/London: Harvard University Press)

  Napier, Susan (2007) "Meet me on the other side: Strategies of Otherness in modern Japanese literature," Rachael Hutchinson and Mark Williams (eds.) *Representing the Other in Modern Japanese Literature: A Critical Approach* (Oxon/ New York: Routledge, 38-53)

  Maclachlan, Patricia L. (2004) "Post Office Politics in Modern Japan: The Postmasters, Iron Triangles, and the Limits of Reform," *The Journal of Japanese Studies*, 30:2, 281-313
- 中国語文献の場合は、原則として以下の記載方式による。

  1) 著者名 2)(刊行・発表年) 3)"論文名" 4)《著書名または雑誌名》 5)発行機関 6)頁。

  (例)

  程希 (2002) 《当代中国留学生研究》, 香港社会科学出版社有限公司.

  張力 (2008) "改革开放 30 年我国教育成就和未来展望"《中国发展观察》第 10 期

- ウェブページを参考文献として掲載する場合には、URL を記し(アンダーラインを引くか< >で囲む)、参照した日付を記載する。

  (例)

  香港・マカオ・広東日本研究大学聯合 <http://ualliance-hmg.org/> 2010 年 5 月1日参照

10. ワープロソフトは原則として Microsoft Word を用いる。

English Submissions and Style Guide

The *Asian Journal of Japanese Studies* (AJJS) invites original English manuscripts from scholars of Japan regardless of membership status in the University Alliance for Japanese Studies in Hong Kong, Macau and Guang Dong Province (UAJS). Once the manuscript is accepted for publication, however, the author must apply for membership or sub-membership in the UAJS. All English manuscripts submitted for consideration must be original. We will not accept previously published material, or materials designated for publication elsewhere.

Manuscripts should be within 6000 words, or 15 A4-size pages at 400 words per page with double spacing, inclusive of footnotes and reference lists. In addition, English manuscripts must be preceded by an abstract in Japanese consisting of 800 characters.

Submissions are by email and should be attached as Word files (in a Windows XP or later version). Authors may use other electronic formats if these are compatible. Please attach a PDF file of the manuscript in addition to the Word file if you are using non-traditional fonts.

In order to facilitate a blind review process, we require all authors to take care in eliminating any personal references from the document. Title pages with author details should be in a file separate from the manuscript and labeled clearly as "Author Title Page." Manuscripts should not show the author's name in text or file headings. Where authors must refer to their own publications, the author's name should be replaced with "author" in both citation form and reference list to ensure anonymity.

Illustrations, graphs, and tables should be separate from the text, and attached to email as electronic files (TIFF, JPEG, etc) with resolutions of 300dpi or greater. Captions should be included with all such attachments. Where necessary we will communicate individually with authors on desired placement of inserts in the manuscript. Please note that in case of publication we require authors to verify that they have permission to use any attached images.

For more information on the formatting and writing style expected for manuscripts, refer to the AJJS Style Guide.

Submissions can be made to the Editors of AJJS at the following email address:

AJJS Style Guide

English manuscripts for the *Asian Journal of Japanese Studies* (AJJS) should be prepared carefully prior to submission so as to minimize written errors and comply as closely as possible with AJJS formatting and stylistic guidelines. Double spacing, Times New Roman 12 point font, and 1-inch margins throughout will be appreciated.

In general, manuscripts will be expected to follow the *Chicago Manual of Style*, 15th edition (2003) except where otherwise specified in this guide.

English spellings will follow American English conventions (consult Webster's Dictionary) and other languages will be rendered in Roman script with italics. Specifically, Japanese words will follow Hepburn Romanization (for example, long vowels or vowel combinations other than "ii" should be written with macrons, "o" should be used for the particle rather than "wo" and "e" instead of "he"). Japanese names should be written in the order of Japanese usage, with surname preceding given name, except where an author has established a popular alternative order.

Numbers in text should be written out between one and ten unless appearing as part of a series (the first of 3 reasons) in the same sentence, at the beginning of a sentence, or in graph/table form. Ages (15 years old; a 15-year-old girl) and currencies (24USD; US$24) are further exceptions to this general rule.

In text citations should make use of parentheses to follow author surnames with year of publication and relevant page number: Fuller (2009: 74) argues…. Reference lists can be formatted with full author names as follows:

Lie, John (2001) *Multiethnic Japan* (Cambridge, Massachusetts/London: Harvard University Press)

Napier, Susan (2007) "Meet me on the other side: Strategies of Otherness in modern Japanese literature," Rachael Hutchinson and Mark Williams (eds.) *Representing the Other in Modern Japanese Literature: A Critical Approach* (Oxon/ New York: Routledge, 38-53)

Maclachlan, Patricia L. (2004) "Post Office Politics in Modern Japan: The Postmasters, Iron Triangles, and the Limits of Reform," *The Journal of Japanese Studies*, 30:2, 281-313

Websites should be referenced along with their date of access.

Double quotation marks "…" should be standard and always enclose periods and commas. Only use single quotation marks to cite within double quotation marks. If quotations run past 4 lines of manuscript text they should be set as indented block extracts, without enclosing quotation marks, and with final citations in parentheses following the final period in the block.

Footnotes should be kept to a minimum. These should be marked with superscript numbers always following the nearest period.

編集後記

第 1 号の刊行から 2 年が経ち、ようやく第 2 号出版の運びとなりました。当初の予定より論文募集期間を延長した関係で、早くからご投稿いただいた皆様にご迷惑をおかけしてしまったことをまずお詫び申し上げます。

前言にもありますように、今号での「アジア視座からの日本研究」の特集は寄稿論文 1 本のみになってしまいましたが、非常に有意義な提示をしてくださった大嶋仁福岡大学教授・日本比較文学会会長にはこの場をお借りしてあらためて御礼を述べさせていただきます。

一般投稿の部では多数のご投稿をいただきました。ご多忙にもかかわらずご投稿くださった皆様にも感謝の意を表したいと思います。残念ながら審査の過程で不採用となってしまった論文もありましたが、いずれも興味深い題材でしたのでまた別の形で拝読できることを願っております。

無記名論文の審査ではやはりご多忙にもかかわらず査読の先生方にご尽力いただくことができ、大変感謝しております。修正も一度ではなく何度かにわたったこともありましたが、その度にご丁寧な、また明確なご指摘、ご提案をいただきました。

グローバルな視点でのアジアの位置付けがますます重要性を増している今、単なる地域研究の一つとしての日本研究ではなく、アジアとの関連性、その中での役割等を念頭に置いた日本研究が有意義になってくると思われます。次号においてもそういった広い視野からの研究成果が多く示されることを期待しつつ今号を閉じたいと思います。次号に向けての活発なご投稿をお待ち申し上げております。

『アジア日本研究』編集委員長　村上　仁　（香港城市大學專上學院）

『アジア日本研究』第 2 号編集委員会

委員長　村上　仁（香港城市大学専上学院）

副委員長　小川　正志（香港大学）

委員　岡田　憲道（香港城市大学）

賈　華（深圳職業技術学院）

邱　雅芬（中山大学）

陳　訪澤（マカオ大学）

松本　真澄（香港理工大学）

Andrew MacNaughton（麗澤大学）

吉川　貴子（香港大学）

劉　金挙（広東外語外貿大学）

『アジア日本研究』第 2 号査読協力者（敬称略・日本語読み五十音順）

伊東祐郎 （東京外国語大学）

宇佐美まゆみ （東京外国語大学）

押野武（北海道大学）

甲斐睦朗 （元国立国語研究所所長）

何志明 （香港中文大学）

鎌田修 （南山大学）

謝崇寧（中山大学華南日本研究所）

周维宏 （北京日本学研究センター）

徐敏民 （華東師範大学）

張憲生 （広東外語外貿大学）

別府春海 （Stanford University）

真鍋一史 （青山学院大学）

楊诎人 （広東外語外貿大学）

アジア日本研究　第 2 号

発行年月日　2013 年 6 月 24 日
発行者　香港・マカオ・広東日本研究大学聯合
The University Alliance for Japanese Studies in Hong Kong, Macau and Guang Dong Province
住所　Flat C, 5/F., Block 6, Sceneway Garden, No.8 Sceneway Road, Lam Tin, Kowloon, Hong Kong.
著作者　香港・マカオ・広東日本研究大学聯合
The University Alliance for Japanese Studies in Hong Kong, Macau and Guang Dong Province

ISSN 2223-5841

ISSN 2223-5841
香港.マカオ.広東日本研究大學聯合会
The University Alliance for Japanese Studies in HK Macau & GDP
香港.澳门.广东日本研究大学联合会

Asian Journal of Japanese Studies

No.2

Preface

Featured：Japanese studies in Asian context
【Featured article】
Japanese Literature Studies in Asian Context — OSHIMA Hitoshi — 1

【Research Papers】
A Study on Semantic Structure and Context Feature of the Tautology Noun-Predicate Sentence — CHEN Fangze and ZHANG Xiujuan — 2 13

Murō Saisei's Haiku Focusing Effort to Dispel Complex — LIU Jinju — 24

Love Stories in *Kojiki* — LIU Wenxing — 43

【Practical Article】
What Makes "Good Writing"? : An Observation of Peer Reviews by Pre-Intermediate Level Learners of Japanese on their Expository Writings — MITO Atsuko — 52

【Book Review】
與那覇潤 著
『中国化する日本　日中「文明の衝突」一千年史』 — AOYAMA Reijiro — 59

Information for Authors — 63

Editor's Note — 65